

Resets

敷き布団

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

理想と現実の乖離に苛まれた年少女の紡ぎ出す糸は、複雑に絡み合って、擦り切れて、リセットされていく。

島崎楓、白鷺千聖、松原花音の三人は、各々の幸せのために何を犠牲に捧げ、何を得るのだろうか。

リセット。

目次

プロローグ	1
第1話 楓の日常	4
第1話 千聖の恋慕	8
第1話 花音の恋慕	12
第2話 千聖の懊悩	17
第3話 花音の赤面	22
第4話 楓の胸騒	27
第5話 楓の返答	32
第6話 千聖の高揚と落胆	36
第7話 千聖の失望	40
第8話 楓の約束と千聖の絶望	44
第9話 Reset	50
第10話 千聖の懺悔と奮起	55
第11話 各々の昏迷	60
第12話 楓の困惑	66
第13話 花音の落胆と楓の傾動	71
第14話 楓の後悔	76
第15話 千聖の葛藤と後悔	81
第16話 千聖の淪落	87
第17話 千聖の墮落と花音の決意	94
第18話 楓の甦生と千聖の乱心	100
第19話 楓の決断	107
最終話 Reset	112

プロローグ

一緒に笑っている少女がいた。

一人で泣いている少女がいた。

そんな少女たちの姿は蜃気楼の如く薄くなっていた。これは夢なのだろうか。それとも現実なのだろうか。それすらも分からないまま、朧気なまんまで、時間がゆっくりと過ぎたような感じがして。自分がどこにいるのかも分からないまま、熱に浮かされたように意識が遠のいていく。

そして視界は一気に真っ暗になった。それまで見えていた人影も、どこか緑を感じさせる背景も、全て真っ黒に染まってしまった。

嗚呼、そうか。

リセット、されたのだ。

重い瞼が徐に下がって光が飛び込んでくる。真っ白な部屋の天井。見覚えの全くない景色に戸惑いながらゆっくりと視線を横に動かす。赤い花が挿された瓶の向こうには、緑の集合体にしか見えない葉っぱどもを揺らす大木の並ぶ姿が辛うじて見える。窓は開いていて、そこから生温かくて気持ち悪い風が吹き込んできていた。ジワリと暑さの滲む晩夏の風だろうか。吹き込む風に押されるように僅かに動く首を反対に寝転ばせた。

なぜ気づかなかったのだろう。ベッドに寝ている自分の横に人影があった。プラチナブロンドの髪を垂らせるその人影はどうやら意識を飛ばしているらしく、こちらが目覚めたことに気づく様子はない。声をかけようと思ったが、声を出そうとしても、なぜか声が喉から出なかった。喉から聞こえるのは声ではなく、ただ息が掠れるだけの音。そもそもその人に声をかけたところでどうしようというのか。名前すら分からないその人に。

少し時間が経っただろうか、喉は相変わらず声とは形容しがたい掠

れた息の音を出すばかりだが、どうやらその声は僅かに音として届いたらしい。ベッドの隣の椅子に腰掛けるその人が首をゆっくりと持ち上げた。

「……楓？」

純白の声が耳に通ってくる。自分の頼りない声にはなかった、はつきりとした声だった。その人はきよとんとした目をこちらに向けている。

「……起きたの？ 楓なの？」

「……あ」

楓。今この人は俺をそう呼んだ。言われてみればそんな名前だった気もする。だが、生憎俺の持ち合わせた全ての記憶を辿っても目の前にいるその人には辿り着かなかった。返事をしようとしてもまともにも声も出せず、もどかしさが募った。

まるで信じられないものを見たかのように、少しだけ虚ろな目をこちらに向けたその人のパールの瞳からは、一筋の涙が流れ出ていた。

「……かえっ、楓エ……ッ！」

がばつと、何も分からぬ俺を急に抱き込んだその人は、暫く顔を埋めたままその顔を上げようとしなかった。

先程から出そうともがいていた声が、漸く形を持った。突然のことだった。

「えっ」と

「……っ。いきなりごめんなさい。目を覚まして……良かった……！」

言動から察するに、俺は長い間寝込んでいたのだろうか。会話の糸口を掴もうにも、今自分が置かれた状況もよく分からず、もつと言えば目の前のその人が誰かすら分かっていなかった。

「えっ……」

「あっ、今すぐ看護師さん呼んでくるから、ちょっとだけ待っていてくれるかしら」

慌ただしく今度は部屋の外へ駆けていった。余りにも色々とか

が起こり過ぎて、自分の周りの状況が整理すらできていない。どうして俺の体はこんなにも動かないんだ？ どうして俺の頭はこんなにもぼうつとしてるのか？ 疑問が湧いてはふつりと消えの繰り返しだった。

そうこうしているうちに、さっきの女性が帰ってきたのかドアの開く音がした。足音は複数響いている。

「起きてすぐに悪いけれど、この後検査があるみたい。花音ももう少ししたら来るから待っていてね」

「え、はい」

看護師さんとやらは何かを話し込んでいるらしく、こちらを一瞥しですぐに慌ただしく一人、また部屋の外へ出ていった。

もう少しで来ると言っていた花音という名前。思い出せそうで思いつけず、その響きが脳のシナプスを駆け巡るだけで割れそうならいに痛かった。

ダメだ。一旦忘れよう。そう思って、いつのまにか瞑ってしまった。目を開いた。そうすると、心配そうに少女がこちらを覗き込んでいたのが視界に入った。

「大丈夫？ どこか痛い？」

「いえ……」

「そう……。本当に良かった」

不安そうな顔がくしゃりと綻んだ。思わず見惚れてしまった自分に気づいて、慌てて目をそらす。

「……楓？ さっきから挙動不審だけれど、どうかしたのかしら？」

「……えっと」

先ほどから様々に問答を繰り返すうちに自分の状況はなんとなくわかった。そして、ずっと聞きたかった、その一言を弱々しく紡ぎ出した。

「あなたは……誰ですか？」

真っ白な箱庭の燻んだガラスは、音を立てて割れてしまった。

第1話 楓の日常

爽やかな緑の風が吹き、足元の草木が靡いていて心地よい。叢に沈み込んだ脚のひんやりとした感覚に身を落としていると、急に視界が真っ暗になった。まるでものすごいスピードで自分が落下しているかのような、そんな感覚に襲われる。独特の浮遊感で居心地が悪いのにもかかわらず、どのように足掻き、身体を捻ろうとしても、俺の体が動くことはなかった。体は動かないのにどういわけか思考だけが冴え渡って、感覚と思考の乖離がさらにこの状況を気持ち悪くさせていた。

「楓、起きなさい」

「……んんう」

ふと、落下していく自分の体の姿が薄くなっていく。先程まで感じていた光景も束の間、霧の晴れるように消えていき、ぼんやりとした視界の中で俺の名前を呼ぶ声が響いた。ああよかった、さっきの光景は夢だったらしい。けれども絶え間なく襲い掛かってくる眠気に抗うのはむずかしく、その声に反応しようという気持ちはなかなか起こらなかった。

「もう……起きなさいっ！」

「……ん、寒っ」

バサアツ、という音とともに掛け布団は完全に剥ぎ取られてしまった。途端に周囲にまとわりついていた生暖かい空気はなくなつて、少し冷気の混ざった空気が流れ込んでくる。その空気に完全に先程の夢は消散してしまい、声ははっきりするとともに視界がはっきりしてくると、俺はいつものようにプラチナブランドの友人が起こしに来てくれたことを悟った。

「……おはよ千聖」

「ええおはよう。下で待ってるから早く準備して降りてきなさい」

「……はい」

凜とした声は寒々しい部屋にメスを入れるように飛んできるので、どこかそんな声に暖かさを覚える自分がいてびっくりする。しか

し、そんな暖かさがあろうとも春の朝の眠気を完全に吹き飛ばすまでには至らない。そんなことが出来ているのであれば、毎朝遅刻なんか考えなくても千聖が完璧に起こしてくれるはずである。

……まあ、とは言っても、逆らったら後が怖いことはよく知っているので、敢えて刃向かいしたい訳はないのだが、今日から新学期ということもあり、些か腰が重い。足首から少し先にどざりと落とされた掛け布団はわずかに熱を持っていて、どうしてもその熱に縋りたくなってしまう。詰まるところ二度寝がしたいのである。

「はあ、ねみい」

噛み殺すことのできない欠伸が誘う誘惑になんとか抵抗して、上体を起こす。今度はあの夢のように体が動かないなんてことはなかった。むしろあの時以上に感覚は鋭敏に働いて、千聖から発された甘美で高貴な残り香が鼻腔を漂っていた。

そして、着替えを軽く済ませると、香ばしい香りが漂ってくる一階のリビングへと降りるのだった。

「おはよう千聖ちゃん！ 楓くんもおはよう！」

「ええ、おはよう花音」

「ん、おはよ……ふあ……」

ありがたいことに簡素ながらも朝ご飯を頂いたこともあり、すぐに眠気が蘇ってきてしまい、花音のふわふわとした眠気を誘う声にも欠伸しながら返事をする。学期始め、それも二年生になって初めての登校日であり、こうやって三人一緒に登校で揃うというのは久しぶりなのだが、積もる話もある、という風にはいかない程度のテンションだったのだ。

「あはは……楓くんなんだかとっても眠そうだね……」

そうは言われてもどうしても朝の弱さには勝てるはずもないので、うつらうつらとしながら、力なくブロック塀にもたれかかる。朝の涼しい空気の染み込んだブロック塀はとても心地よかった。

「つてもう……こんなところにも寝癖ついてるじゃない……」

「ん……」

そのようにブロック塀に気怠い体を預けていると、千聖が俺の頭のとっぺんより少し後ろの寝癖をそつと撫でた。さつき朝ごはんを食べている間に寝癖は直されていたはずだが、まだ寝癖の生き残りがいたらしい。どうやらこいつはなかなかの曲者のようで、何度抑えついても跳ね上がってくる。千聖も何度か直そうとするも直らなかつたらしく、仕方ないと言わんばかりに息を吐いた。正直寝癖の一つや二つ付いていても気になるような性分でもないのです、そんなふうのため息を吐かれるのも複雑な気分である。

「もつとシャキツとする！ そんなんだから高校生にもなつて彼女の一人も出来ないのよ？」

「……余計なお世話だつての」

別に彼女を作りたいわけでもない俺にとつてはどうでもよい。が、まあ敢えて正確に事実を突きつけられると煩わしい。そりゃ千聖ほどの美貌と努力できる才能があれば、恋人を作ることなど造作もないのだろうが、俺に敢えていう辺り当てつけか何かだろうか。ともかく文字通りの余計なお世話である。恋人を作るぐらいならもう少し朝を優雅に、いや、悠長に過ごせる時間の方がよっぽど作りたい。

「あはは……千聖ちゃんもそこまでにしてあげよう？」

「……花音がそう言うなら」

花音が千聖からのありがたいご指摘の連打を止めてくれたのだが、ひたすら俺に手厳しい千聖とは対照的に、花音は朝っぱらから何か小難しい顔をしている。いやまあ、千聖は千聖で俺の寝癖とかと格闘して難しい顔してたけども。何やら目の焦点が合っていないように、こちらの視線など意にも介さないほどだったから、思わず声をかけた。

「……花音？ どうかしたか？」

そんな声は無事届いたらしく、覗き込んでみると花音の目線はちゃんと俺の目をしっかりと捉えていた。

「……ふえっ?! な、な、何も無いよ?!」

そのままやけに高い声を上げて思いつきり仰け反った。その顔を見ると先程までの悩み事を抱えていそうな、そんな顔もなく、いつも通りの花音がそこにはいた。

「ふふっ、びっくりする花音も可愛いわね」

「か、からかわないでよ〜」

千聖に揶揄われる花音は暗い雰囲気など何も感じさせない笑顔で大ぶりの反応をしている。こう言うのを見ると無性にいじり倒したくなるんだよな。

「おー、可愛いぞー?」

「楓くんまで……」

花音の顔はボツと紅くなる。この反応を見るのが、悪趣味だとは自分でも思いつつも楽しくなっている自分がいた。

第1話 千聖の恋慕

人に出逢いを感じさせる春がやってきた。窓から外を見渡せば、まだわずかに薄暗い街の中で煌々と赤く燃える朝日に照らされて、濃いピンクの桜がどつしりと構えて佇んでいる様子がうかがえる。

今日は二年生最初の登校日ということで、花音と一緒に学校まで行こうと約束をしていた。でも一緒に行くのは花音だけではなく、花音には言っていないけれどあいつも連れて行こうとして、玄関から靴を履いて表に出る。レオンだってまだ眠っているような朝の時間。あいつは、楓は起きているだろうか、起きてるわけないわよね。

まだ人通りもない住宅街の細い道を数十メートル歩いて呼び鈴を鳴らす。鳴らしても人が出てくるわけがなくて、いつも通り、ブロック塀の上に置かれた鉢植えを持ち上げて鍵を手取る。朝の空気の冷たさに当てられた鍵はやはりヒンヤリとしており、朝の眠気がさらに醒めさせられるようだった。

家に入って階段を登りノックすることもなく部屋のドアを開ける。……やっぱり起きてもなかった。それどころか起きる気配もなさそうなぐらいに健やかな寝息を立てて熟睡モードらしい。

「おはよう楓。起きなさい」

名前を何度呼びかけても全く起きる気配はなく、揺すっても同様だった。多分だけど経験上、本気で揺すって大声で呼びかけないと、この状態の楓は起きないだろう。

……。はあ、馬鹿らしい。何より情けない。こうやって想い^楓人にバレないような形でしか、その好意を示せない自分が情けない。相手にその好意が伝わらない以上、その行為は自己満足でしかないのに、それで満足ができてしまう、いや、満足しようと我慢している自分が情けなくて堪らない。

情けないとは思いつつも、卑怯だとは思いつつも、惨めだとは思いつつも。

私は、何度目かすら分からない口づけをした。

暫くばーっとしてしまっていた。どうやらこいつの寝顔をぼんや

りと眺めていたらしい。でも、起きている様子は全くと言っていいほど見られないので、そんな姿は見られていることもないだろう。さて、そろそろ本当に起こしましょうか。

「楓、起きなさい」

「……んんう」

掛け布団をめくる。きつとこの寒い時期にこれをされるのは嫌なのだろう、体を振って、しかし起き上がろうとはしない。

「もう……起きなさいっ！」

「……ん、寒っ」

バサアツ、という音とともに掛け布団を完全に剥ぎ取った。流石にこれには堪らず楓も起きようという気になったようだ。

「……おはよ千聖」

「ええおはよう。下で待つてるから早く準備して降りてきなさい」

「……はい」

やりとりだけ見ればまるで自分が楓のお母さんみたいに見えてしまうだろう。それでも、こんな関係性もいいなと思えてしまう自分は、それはそれで情けなかった。

数分経って降りてきた楓に無理やり朝食を食べさせ、朝の準備を粗方させると、花音と約束した時間に遅れないように楓と二人、家を出たのだった。

「おはよう千聖ちゃん！ 楓くんもおはよう！」

「ええ、おはよう花音」

「ん、おはよ……ふあ……」

「あはは……楓くんなんだかとっても眠そうだね……」

花音は元気よく挨拶を返しているというのに、楓はやっぱり未だに眠気と闘い続けているらしい。いつも、去年からずっと朝の時間帯で登校時間がかぶる時はさっきのように起こしにいつているわけだが、やはり楓の朝の弱さは尋常ではない。

「つてもう……こんなところにも寝癖ついてるじゃない……」

「ん……」

ブロック塀に気怠そうな体を預けていたからか、私がさつきまでは見えなかった角度に楓のぴよんとまとまった寝癖を発見する。さつき楓が朝ごはんを食べている間に寝癖は全て直せていたはずなのに、また何かの拍子に跳ねてしまったのだろうか。この茶色の跳ね毛はなかなかの曲者のようで、何度抑えついても跳ね上がってくる。……これはもう無理そうね。

よくよく見ると、寝癖だけではなく、制服の襟の部分も立っている。……全く、楓は本当にダメなんだから……。

「もつとシャキツとする！ そんなんだから高校生にもなって彼女の一人も出来ないのよ？」

「……余計なお世話だったの」

ついつい強めに刺さるような事実を突きつけてしまったが、楓にとってはそんなことどこ吹く風のように、軽く受け流すとまた朝の睡魔に負けそうになっている様子だった。そんな自由な風に、なんの柵もなしに居られる事が少しだけ、ほんの少しだけ羨ましかった。

「あはは……千聖ちゃんもそこまでにしてあげよう？」

「……花音がそう言うなら」

花音はこのやり取りに呆れているような反応でさりげなく私を止めてくれる。花音が居てくれると、私の心がこうもすぐに穏やかになるのだから、本当に花音の存在はありがたかった。けれど、その場が落ち着いたら、花音は何か考え事をしているように難しい顔をして、どこか宙をぼんやりと眺めていた。

「……花音？ どうかしたか？」

楓はそういうところにはなぜか無駄に鋭く気づいてしまう。暗い顔をしていた花音の視線は、急に覗き込んだ楓の顔の方を向いて。

「……ふえっ?! な、な、何も無いよ?!」

素っ頓狂な声を上げて、思いつきり仰け反る。でもそんな反応もどこか小動物じみっていて可愛らしい。どこか守ってあげたくなるような愛嬌がある。

「ふふっ、びっくりする花音も可愛いわね」

「か、からかわないですよ」

「おー、可愛いぞー?」

「楓くんまで……」

花音をからかう流れはそのまま花音の家の前で続き、花音が若干拗ね気味に可愛らしくぷりぷり怒りながら歩き出したのを見て、楓と二人、向き合って微笑みあったのだった。

何でもないことが、幸せに思える。そんな幸せに浸らないと心の安寧が得られそうにもなかった私は、一体全体、何か思い通りにいかない世の有象無象に疲弊しきっていたのかもしれない。私は一体何に不安を、窮屈を、そして嫉妬を抱いているのだろうか。それすらもはつきりしない。

私のそんなマイナスの感情を他所に、世間は春の訪れだの桜が満開だのゴールデンウィークだのと騒いでいるが、憂鬱に塗れている私にとってはそういう流行りの文句全てが煩わしかった。……タレント、芸能人としてはそれはある意味失格なのかもしれないが、そういう複雑な情報はただただ無情な言い方ではあるけれど無駄なものだった。私の心の安寧には何ら利するものではない。儂いほどに……こんな言い方をすると、あの厄介な幼馴染を思い出すから使わないようにしているのだけれど、散ってしまう桜は儂いのだが、季節が過ぎればその幽玄を忘れてしまう。私はそれが嫌だった。ずっとただそこに在る、そこに在り続けるものに委ねたかったのかもしれない。

こんな冗長な思惟も、ただ一時の安寧には資するけれど、ずっと続けられるものではないし、少し寒々しかった。

だからだろうか、隣を歩く楓の、赤みがかかった手が少しだけ触れた時、そこから熱がぱつと全身に広がる錯覚を覚えた。隣の小川に投げ込まれた石が同心円を数度描くように、私の手の甲を中心とした同心円の熱がほわりと広がる。委ねるといふよりも、溺れそうなその温かみが少し肌寒い春の日の下の私を包んだ。

第1話 花音の恋慕

清々しい、けれども少しだけ憎くもある朝がやってきた。ベッドの横にある窓の、カーテンの隙間からは朝日が差し込んで、部屋を四角く照らしている。カーテンをゆつくりと滑らせて外を見ると、もう道路にはちらほらと人の姿が見える。奥の方には華々しいピンク色をした桜並木が頭を突き出していた。

「今日から二年生……かあ」

去年も色々あったけど、なんだが今年の一年はもつともつと色々なことが起こる予感がした。予感がしたただけだけど。毎日が充実するのは楽しみだけれど、大変なことにならないければいいなあ。

「……あつ?! 千聖ちゃんと約束してたんだった!」

朝日を浴びながら少しセンチメンタルになっていたが、そういえば今日は千聖ちゃんと朝から一緒に学校に行こうって約束してたんだ。枕元の時計を見れば、そこまで時間の余裕がないことはすぐに分かった。慌てて制服を引っ掴んで、リビングに降りていくのだった。

靴を履いて玄関のドアを開ける。向かいのブロック塀のところに、約束の相手はいた。朝もかなり早いのに全く眠そうな様子を見せない千聖ちゃん。その隣には朝の早さにすでに負けてしまっている長年の想い人が塀によりかかっていた。

「おはよう千聖ちゃん! 楓くんもおはよう!」

「ええ、おはよう花音」

「ん、おはよ……ふあ……」

「あはは……楓くんなんだかとおも眠そうだね……」

大きな手でも覆いきれないほどの大きなあくびからは、その気だるさと眠気が十分に伝わってくる。それでも一応もたれかかっていた体を起こして、なんとか立っているらしい。長かった休みの期間、会うことが出来ずに悶々としていた私の心はそんな彼にこうして会う

ことが出来ただけで晴れやかになった。けれど、やっぱり複雑で、特に千聖ちゃんと楓くんの距離が目には焼き付けられるだけで、私の晴れた心はまた曇り始めるのだった。

「つてもう……こんなところにも寝癖ついてるじゃない……」

「ん……」

まるでお母さんみたいに楓くんの頭の横の、ぴよんと跳ねた髪の毛を抑えて寝癖を直そうとする千聖ちゃん。どうやらしぶといらしく、何度抑えても抵抗してくるらしい。

「もつとシャキツとする！ そんなんだから高校生にもなつて彼女の一人も出来ないのよ？」

「……余計なお世話だつての」

「あはは……千聖ちゃんもそこまでにしてあげよう？」

「……花音がそう言うなら」

渋々といった様子で小言を言うのはやめたらしい。

楓くん彼女いないんだね。千聖ちゃんはそれをまるでダメなことのように言うけれど、私は正直それが少し嬉しかった。だつて自分の好きな人に、他に好きな人が居たら嫌だもん。……なんて心の奥で思うだけで、言葉には出せないけれど。本音を言えば、さつきみたいな千聖ちゃんと楓くんのやりとりが羨ましく思う自分がいた。けど、それはあまりに醜くて、見ないフリをしていた。幼馴染という関係性に甘えて何もしてこなかった自分の八つ当たりでしかなかったから。

「……花音？ どうかしたか？」

グイッと、急に楓くんの顔がどアップになって、思わず仰け反る。

「……ふえっ?! な、な、何もないよ?!」

「ふふっ、びつくりする花音も可愛いわね」

「か、からかわないでよ」

「おー、可愛いぞー？」

「楓くんまで……」

結局、学校までの少しの時間は終始それをネタにからかわれ続けたのだった。恥ずかしいけれど、不思議と悪い気はしない。……Mじゃないよ？ ただ、そんなやりとりが心に安らぎをくれるの。上手く言

葉には出来ないけど、とつても暖かい癒し。そんな当たり前の幸せを享受しながら、桜の花びらが降る川沿いの通学路を歩いた。

こうしてこの三人で過ごす登下校、いや、ほとんどは登校の時だけではあるけれど、その僅かな時間は私にとつて癒しをくれるだけではなく、少しばかりの緊張と、ほのかな焦燥を抱かせてくれる。

きっと私の心の内を見通せる人がこの世にいるのだとしたら、私の淡いけれど濃くなってしまった乙女心はいとも容易く見抜かれてしまうのだろう。私は彼、島崎楓くんを恋をしているのだ……と思う。これがはつきり恋だつてことはあまりよく分からないけれど、きつと恋なんだ。恋だつたらいいな。そうだとばかり十年以上自分で思い込もうとしている。

けど、この思いを告げるには私はあまりにも臆病すぎて、きつとこの思いは私の頭上を舞っているソメイヨシノの花弁のように散つてしまうのだろうって、半ば諦めている自分もいた。恋をしている自覚はあるし、その恋が叶って欲しいって思ってるはずなのに、その恋を早く諦めたいという、真つ向から矛盾する感情が、この通学路を歩いているとなぜか無性に沸き立ってしまう。

「……はあ」

暖かくなってきたとはいえこの時間帯はまだ肌寒く、少し上がった息に情けないため息を混じらせた。息遣いは自分でも届かず、隣を流れる小さな川で透き通る水の流れる音と、アスファルトに響く三人分の足音だけしか聞こえなかった。そんなものだから、そのため息が他の人に届くはずないと思つていて。

「やっぱり花音、朝からぼーつとしてるけれど大丈夫？ 何か悩み事でもあるの？」

「……えっ？」

次に自分の意識が現実に戻された時には、感傷的な桜並木を通り過ぎた所で、千聖ちゃんにさっきの楓くんよろしく顔を覗き込まれていた。

「何でもないよ？」

大丈夫かなあ。声、震えてないかなあ。何でもないと平静を装つて

るつもりだけど、果たして千聖ちゃんにそんな付け焼き刃の仮面で騙し通せるのか。透き通っていて女の私でもその美麗さに貫かれそうな濃紫の双眸には、きつとその仮面を外してくるのだろう。

「……………こじや話しづらいことよね、後でもう一回話しましょう?」
「何で俺を睨みながら言うんだよ……………」

右隣の楓くんを一瞥すると、またこちらに振り返って柔和な笑みを浮かべる千聖ちゃん。普段は凜として、私には分かるはずもない芸能界の厳しさを泰然と眺めているその表情が潰れて、女の子の顔になる千聖ちゃんのその雰囲気、私はとても好きだった。勿論その好きは楓くんに対する好きとは違うのだけれど。

「女の子には男には知られたくない秘密もたくさんあるのよ?」

「……………ふーん」

千聖ちゃんのそんな発言も興味がなさそうに受け流す楓くんは、ちよつとだけ拗ねたように口を尖らせる。

「……………やっぱり向こう十年楓がモテることはなさそうね」

「あはは……………」

「モテたいなんて誰も言っていないですー」

「……………ふふっ」

苦笑いしか浮かべられない私と違って、千聖ちゃんはそのやり取りを本当に楽しんでいることが容易に伝わってくるぐらい、この三人の他には中々見せない笑顔を浮かべている。その笑顔はテレビで見られる笑顔とも違う。そして、楓くんも自然体でいるように笑っていた。それを微かにでも感じ取るだけで、胸が縛り付けられたように苦しくなって、けど、それがどこか暖かくて心地よくもあった。

私は一体、どうしたいのかな。

『女の子には男には知られたくない秘密もたくさんある』

私にも、楓くんには知られたくないけど、知って欲しい、そんな秘密もあるんだよって、臆病な私には言えるわけないのだった。

そして、この秘密は、できることなら千聖ちゃんにも知られたくはなかったのかもしれない。けど、やっぱり自分からはそんなこと、言えるわけがないのだった。少なくとも、それだけの長い時間溜め込み

続けた思いの丈の葛藤を打ち明けるには、それ相応の引き金が必要で。何より、自分がそんな醜い感情をかけがえのない親友に抱いていることをその当の本人に告げられるほど私は勇敢ではなかったのだ。

校門脇の桜の花は散り始めたばかりだった。

第2話 千聖の懊悩

入学式などの行事も終わって、普段通りの授業が帰ってきたある日の放課後。私は自分の芸能事務所から呼び出しを受けた。マネージャーから、テレビドラマへの出演が決まったとの連絡を昨晚受けたので、その打ち合わせかと思っただが、どうやらそういうことでもないらしい。

本当はお仕事が入っていないなかったから花音とお茶をする予定だったが、突然の呼び出しによってドタキャンすることになったせいか、私の心はどことなく落ち着きがなかった。いつもよりも数倍重い足取りながらも事務所に辿り着いて、ミーティングルームの扉を開いた。

これが、私、白鷺千聖がPastel? Palettes? Palettesというアイドルの一人として歩みだす、その第一歩であった。

「そっか……、じゃあまずはドラムをしてくれる人を探すところからだね！」

Pastel? Palettesとして活動することの概要を私はここで初めて知らされたわけだが、その計画はなんともお粗末なものだった。最近流行りのガールズバンドに乗っかるべくアイドル×バンドというジャンルを切り開こうと銘打った割には、私含め楽器を演奏した経験がまともにあるのは四人中たった一人。それどころかドラマーがそもそも不在。検討されている初めてのライブでは当て振り&口パク。確かに私も数ヶ月で他のバンドのベーシストと遜色ない程度にベースの技術を向上させると言われれば、はつきり言っただけならいいだろうから仕方ない部分でもあるが、はつきり言っただけには不安しかなかった。

「でもドラマーなんてそう簡単に見つかるのー? アタシみたいにオーディションで探せばいいと思うな！」

「今からもう一度オーディションで候補者を選抜する、というのは少

し時間が厳しそうね。とにかくスタジオミュージシャンとか、経験者を当たってみるほかないでしょうね」

「そういえば先程スタジオからドラムの音が聞こえてきました！ 皆さんで行ってみませんか？」

「そうだねイヴちゃん！ 行ってみよっ！」

私以外の集められた三人は経歴こそ違えど、みんな元気一杯で、アイドルとしての活動に目を輝かせているように見えた。そう見えたのは私がこのアイドルという道に迷いがあるからなのだろうか。正直、自分の心すら分からなかったが、みんなについていくようにスタジオへ向かい、そしてスタジオで機材を調整していたドラマー、麻耶ちゃんを勧誘して、なんとか五人揃うことになるのだった。

今後の活動のことや、メンバー同士の自己紹介なんかを全部済ませてから家路につくと、すでに夜も遅くなっており、月も高くまで昇っていた。

「それじゃあまたね！ 千聖ちゃん！」

「……ええ。気をつけてね」

途中まで帰り道が一緒だった日菜ちゃんとも別れて、赤みも残っていない黒い道をひたすらに歩く。その間も考えることはただアイドルとして自分がやっていけるかどうかということだけであった。キャリアアップに繋がるのであれば、それは私にとってチャンスなのであるから是非とも大いにトライしてみるべきだろう。しかし……お世辞にも万全とは言えないような内容がスカスカのプロデュースで果たして私の求めるものはあるのだろうか。それに、私の顔はアイドルとしての顔だけではなく、心にも余裕がないというのが本音のところであった。

『え……、私がヒロインって本当ですか？』

『はい、白鷺さんがヒロイン、主役も主役です』

『主役……』

Pastel? Palettesの結成と同時にマネージャーから私に伝えられたのはあるドラマへのキャスティングだった。原作が相当有名な作品ということもあり、話題性もあるに違いない。これを成功させれば、間違いなく女優としてその名を馳せることだって出来るだろう。是が非でも、受けたい。……それが例えPastel? Palettesというアイドルのお仕事が増えたとしても。

『それは……今の舞台のお仕事と、そのPastel? Palettesの活動と並行して、ということでしょうか』

『そうですね。ブッキングは避けるように調整はします』

勿論ブッキングなどはもつての外だが、果たして私に全てをこなせるキャパシティーはあるのだろうか？ 問いかけてみても、全く答えは浮かばないけれども、私にこの大舞台を断るなんて考えはなく、お受けすることにした。

「千聖？…こんな夜に何してんだ？」

「えっ、……楓？」

私がそんなつい先程の悩み事を改めて悩んでいた時に、ふと交差点の街灯の明かりの下に現れたのは楓だった。予想だにしない人物の登場に驚きを隠せなかった私の顔はきつとひょうきんなものだったろう。

「……しかも何か浮かない顔してんだな」

「浮かない……顔？」

どうやら私は不安に押しつぶされそうな顔をしていたらしい。私は必死に表には出さないようにしていたはずなのに、付き合いが微妙に長くなりつつあるこの男には見抜かれてしまったのか。

「なんか悩みでもあんだろ。時間あるならちよっと公園でも行くか？」

「えっ、ええ……」

私が断る暇もなく歩き出した楓の後を追って、曲がり角を曲がってすぐにある小さな児童公園に向かった。公園はすでに薄暗く、小さな子どもが遊んでるようなこともなく、ただ寂寥感の残る無機質な遊具だけがポツリと立っている。楓はブランコの近くまで寄ると、右手に吊るしていた食材やらの入ったビニール袋を脇に置いて、座ってゆっくりと漕ぎ出した。私もその隣のブランコに同じように座るのだった。

どちらからも言葉を発さない無言の時間が暫くすぎたころ、痺れを切らしたように楓が口を開いた。

「で、何があったんだよ？」

「……特に何かがあったと言うわけではないのだけれど」

そもそもPa s t e l ? P a l e t t e s が始動することを部外者に教えていいのか分からなかったのも、なんとなく暈して言ったつもりだったが、隣から飛んでくる目線は訝しげで鋭いもので、私は観念して話し始めた。

「今度ね、私、アイドルグループに入ることになったの」

「ふーん、そうか、それで？」

「……けど、私には他のお仕事だってある。女優としての仕事もこなしながらアイドルができるのか私には分からない……。だから、正直に言っただけその話を受けようか断ろうか迷っているわ」

「……なるほどなあ」

「またもや暫く無言の時間が続く。こんな話楓にしたって解決するはずがないのに……大人しく話してしまっただけ私にバカなのかもしれない。そう思ったところで、楓の口が開いた。

「まあ、千聖のことだから、また損得勘定で考えてるのかもしれないけどさ、とりあえず頑張ってみればいいんじゃないか？」

「……口では頑張るとは簡単に言えるのだけれどね」

「ちよつと分かれたような発言が気に障って、嫌味のように返してしまう。本当は親身になって話を聞いてくれるだけで心臓が飛び跳ねるほどに嬉しいというのに。」

「ま、それはそうだけどな。でもさ」

「……………」

急に暗い夜空を見上げて、目を細めた楓の横顔をじっと見つめた。次に紡ぎ出される言葉を静かに待った。

「俺は、そうやってストイックというか、ひたむきな千聖がかっこよくてなんか好きだな。そっちの方が良いと思うぞ」

「……………楓」

一体何に私は悩まされていたのだろうか。しかし私はなんと単純なのだろうか。楓からその言葉が聞けただけで、アイドルになる覚悟ができてしまったというのだから。それぐらい嬉しかったんだもの。仕方がないわよね。アイドル失格なのかもしれないけれど。

「千聖が頑張るってなら応援するぞ、俺はな。その代わりちゃんとやり切らなきゃダメだぞ?」

「……………ふふつ、ええ、分かってるわ。話を聞いてくれてありがとう」
「ん」

自然と顔の筋肉の力が抜けた。楓はこちらを見ることもなく、脇に置いていた買い物袋を手にとつて立ち上がった。今はそれで良い、いつか、いつかきつと振り向かせてやるから。

「帰るか」

「……………ええ」

私も立ち上がって、先に歩き出した楓に追いつくように早歩きで歩き出す。

二人で歩く夜空には星が僅かに瞬いていた。

第3話 花音の赤面

コクのある匂いがカウンターの奥から漂ってくる。始業式から2週間ほどが経って、なんとなくクラスも落ち着いてきた頃、私は千聖ちゃんに誘われて商店街の喫茶店にやってきていた。この間千聖ちゃんが急なお仕事で約束をドタキャンしてしまったお詫びということらしい。千聖ちゃんは律儀だなあ……なんて漠然と考えていたけど、でもやっぱり千聖ちゃんとカフェを巡るのは楽しくて、そんな考えがすぐ泡沫となって消えてしまうほどに私の心は踊っていた。

……踊っていたのだが、自分でも理由がよく分からないのにぼうつとしている。羽沢珈琲店と書かれたエプロンが慌ただしく翻っているのを、コーヒークップを口に傾けながらぼんやりと眺めていた。

三日前のことだった。放課後、その日はバイトも何もない日で、千聖ちゃんもお仕事で学校に来ていなかったので、いつもよりもゆっくりとした足取りで帰宅の途についていた。時間があるからと言って変な寄り道をしたりはしない。そんなことをすると私は迷子になってしまうという過去の経験を忘れ去ってしまうほど私は愚かではない……と信じている。幼い頃家の近所だというのに迷子になって楓くんに迷惑をかけたことだってよく覚えている。思えばあの頃の方が幸せだったのかもしれない……。

そんな懐古はともかく、そういうわけで帰りの道の変えたりはしないのだが、その分いつもよりも通学路の周りに何があるのか、風景を眺めながら帰った。

丁度川沿いの道に辿り着いた頃だろうか。ついこないだ歩いた時には満開だった桜の木々もすっかり葉桜になっており、川沿いの風景は一変していた。なんだか胸が一気にざわついて辺りをキョロキョロ見回しながら帰り道を歩いていた。我ながらあの様子は不審者と思われても致し方ないような、そんな有様だったと記憶している。

ゆっくり歩いていたはずが、いつのまにか足早に歩いており、ちよつと一息つこうと周りの風景を見ようと土手の下の方の道を見下ろした時だった。

「あっ」

私が目にしたのはずっと私が恋慕を抱き続けている楓くんの姿だった。それだけなら私の心はさほどざわつかなかっただろう。楓くんの隣には制服を着た私たちと同じくらいの女子生徒がいたのだった。花咲川の制服でないことは分かるけれど、私の知り合いというわけでもなく、ただ私の知らない女の子が楓くんの隣で親しげに歩いている。その事実だけが私を串刺しにしたのだ。別に私は楓くんの彼女でもなんでもない、腐れ縁となってしまった一人の幼馴染ではないというのにこのような気持ちを抱くのは間違えているのかもしれない。しかし、そんなことを冷静に分析できるほど私の心は穏やかではなかった。

「」

ふと我に返った瞬間、なんだかその光景を見ているのが申し訳ないような、何より辛くて辛くて仕方がなくて、楓くんに見つからないようにさつとその場を離れてしまった。

あの子は誰だったのか、今日の朝も楓くんに聞くことは出来なかったのであいも変わらず私の心は川辺の一件以来ざわつきが収まらないのであった。

「……花音？」

「……ふえっ?! なっ、何か千聖ちゃん？」

千聖ちゃんの声が耳に届いてふと意識が元に戻る。どうやら私は千聖ちゃんとカフェにいながら完全に話が上の空だったらしい。それほどもでに私の心は楓くんに囚われていた。

「ずっと向こうの方を見つめて焦点があつてなかったから声をかけた

のだけれど。何かあったの?」

千聖ちゃんの淡い桃紫色の瞳は私の心をひっくり返して観察するかのように透き通っている。『何かあった』と聞かれても、原因こそ分かれど、私にもこの感情はよく分かっていたいなかった。

「ううん、何でもないよ。心配してくれてありがとう」

「そう……なら良いのだけれど」

手に持ったカップに視線を移して、波立つ茶色の水面を眺める。ランコロンという小気味好い音が右耳から左耳へと流れていって、けれどその音の在り方を確かめることもなく私はその茶色い波間を見つめ続けていた。

「……やっぱり花音、何か悩みでもあるでしょう? 私には話せない

悩みかしら?」

「うーん……。私にも何でこんなに悩んでるかあんまり分からなくって」

いや、正確に言えば何について悩んでいるかは明確だ。島崎楓くん。彼以外のことでは悩んでるわけではなく、もつと言えば彼の恋愛事情で悩んでいるのは確かなのだが、彼についての何で悩んでいるかが分からないのだ。いや、分かりたくないと言った方が正しいのかもしれない。コトリとカップをコースターに戻して、何と返せば良いかをずっと考えていた。

「楓のことかしら?」

「……ふえっ?!」

そんな思案は一瞬でかき消されて、思わず飛び出たひょうきんな声に驚き口を押さえて周りをキョロキョロと見回す。ああ、やってしまった。みんなの目線がこちらを向いてしまっている。けれど千聖ちゃんは何も気にすることなく上品に笑みを浮かべていた。

「その反応は当たり前みたいね。それで、楓がどうかしたのかしら」

「えっえっ、な、なんで楓くんのことって分かったのお……?」

「ふふっ、テーブルにずっと楓って文字をなぞってるじゃない。すぐ分かったわよ?」

「ふえっ……」

考えていたことはどうやらすぐに出てしまったらしい。千聖ちゃんの前で隠し事なんて無理だったかな。きつと心の奥底まで見抜かれてしまっている、それはきつと私のとんでもなく臆病な部分まで、そんな気がした。

「別に何かがあつたわけじゃないんだよ？　ただその……」

嘘だ。けど、こんなの説明なんかできないよ。

「その？」

「えつと……ふえく！　無理だよお！」

「……ふふつ、花音つたら、可愛いわね♪」

「もお千聖ちゃんっ！」

どうやら私は千聖ちゃんの掌の上で踊り続けていたらしい。そのまま私は千聖ちゃんに質問責めに遭うばかりで、しかも何も答えることが出来ずにどこか甘ったるいコーヒーをいつきに飲み干してはお代わりしてと繰り返したのだった。でもなんとかそのことは言わずに済んだのであった。

私が三杯目のコーヒーを飲み干した辺りで、千聖ちゃんが時計の方にチラツと視線を動かした。時計はもう6時過ぎを指しており、気がつけばあたりはそこそこに暗くなっている。

「そろそろ出ましようか」

「うん……そうだね」

私がレジの方へ向かおうとすると千聖ちゃんは腕で私を遮って、しーと口に人差し指を当てて意味深な視線を向けた。今日の私は千聖ちゃんに勝てそうにないらしいので、大人しく店の外に出ておく。

1分ほどして店から出てきた千聖ちゃんと一緒に帰り道につく。夕日はとうに半分以上山の向こうに隠れていた。なんとなくさつきから熱かった頬も、少し冷めたような気がした。

「ねえ千聖ちゃん……」

「んっ、何かしら花音？」

「……千聖ちゃんなら、何か行動を起こしたいけど怖くて仕方がない時はどうする？」

私が聞きたかった質問を、これ以上ないほどに遠回しに、オブラー

トに何重にも包んで尋ねてしまった。

「行動を起こしたいけれど、それが怖い時ということかしら?」

「うん……」

千聖ちゃんは少しだけ顎にグーを当てていたが、すぐにこちらを向いた。

「もし自分が、本当にその行動を起こしたいなら、怖くても行動すべきじゃないかしら。もしもその行動以外の策があるならば話は別だけれど」

「……そっか」

その行動以外の策か……。私の本当の願いを叶えるためには、その行動以外の策なんてものは何一つ存在しないように思えた。……やっぱり、行動しないと変わらないんだよね。

「……顔が少し赤いけれど、何かあったの?」

「……えっ?」

「ふふつ、何を考えていたのかしら?」

「ふえつ、ゆ、夕日のせいだよっ!」

「本当に?」

「うう本当だよお」

ああダメだ、恥ずかしくて顔を手で覆い隠さずにはいられなかった。どうして千聖ちゃんはこんなにも的確に私の心を見抜いてくるのか、本当に謎で仕方がなかった。

「……花音、後悔だけはしないようにね」

「……うん」

そんな細々と私の耳に入ってきたわずかな声の震えは、左耳に流れることなく私の頭の中をグルグル回り続けた。

西日はさらに沈んで辺りはさらに暗くなっただけ、私の頬は誤魔化せないほどにまだ赤みを帯び続けていたのだった。

第4話 楓の胸騒

クラスの喧騒から半ば逃げるようにして、すっかり葉桜となってしまった木々の下を抜けて校門が出る。別に逃げるようにしてと言ってもボツチだとか登校拒否だとかそういうわけではない。もし仮に俺が登校拒否になったとしても千聖にきつと無理やり叩き出されるだろう。ただ、なんとなくそういう煩いのが今は鬱陶しく感じたのかもしれない。

うちの高校の生徒がよく使っていそうな校門の前の自販機の前を歩きながら、ふとなぜ俺がそんなセンチメンタルな気分沈んでるかを考えてみた。原因というものを考えてみてもそんなに思い当たる節があるわけではない。

「……千聖と花音か」

去年は機会があれば一緒にカフェに行ったり、二人の遠出について行ったりと、仲良くしていたような気のある俺たち三人だが、最近が集まったりする機会も何もなかった。朝と一緒に学校に行ったりすることも減った。なぜか千聖は甲斐甲斐しく朝に起こしにきたりとありがたいことに世話を焼いてくれるで会うことも多いが。

それでも俺は千聖や花音の通う花咲川に通ってるわけではないので、二人に学校内で会うことは無い。千聖は以前言っていたアイドルバンドの結成や舞台が忙しいらしく、花音もなんだかちよつとヤバそうな集団の一員となってバンドを始めたということらしい。しばらく顔を合わせることもないが、二人とも大丈夫だろうか。

飲み干したオレンジの缶ジュースを自販機横のゴミ箱に放り投げて入れようとしたが、どうやらこういう悩んでいるときは上手くいかないらしく、缶は一度では入らずにカコンと音を立てて道路に落ちてしまう。

なんとなく、なんとなくだけれど、自分は寂しいのだろうか。少しわがままかもしれないが、形の差はあれだバンドという共通の何かに向かつていこうとする親友二人に置いていかれているようで寂しいのかもしれない。

置いていかれることが寂しいからと言ってバンドを始めのような
気概も才もなく、悩みなんか全部見たくなくて、潰れた缶をゴミ箱の
中に叩きつけてしまった。

「楓くん」

「……えっ、花音?」

ゴミ箱の中に叩きつけられた缶を見下していると、不意に背中から
弱々しいけれど、芯の通った声がかげられた。花咲川の制服を着た花
音だった。

「やっぱり楓くんだったんだね」

花音は安心したような表情を見せると、わかりやすく息をついた。

花咲川から俺の高校までは一駅とまでは言わずともそこその距
離があった。家からの方向こそ大体同じなのだが、その距離にすると
徒歩でも30分はゆうにかかる。そして何より俺は。

「よく、迷わなかったな」

「ええっ?! 気にするところそこなのっ?!」

ある意味今日は吹雪にでもなるんじゃないかなろうかという心配がお
こったが、それはひとまず置いておくことにした。

「……それで、急にどうしたんだ?」

「えっと……話したいことがあって」

花音の顔には一抹の不安を孕んだ暗さと、落ち着かないような焦燥
感が見て取れた。どうやらここで立ち話というわけにはいかないら
しい。

「とりあえず、歩きながら話すか」

「うんっ」

葛藤と戦わせた缶を捨てた自販機の近くを後にして、まだ下校する
生徒も殆どいない通学路を二人で並んで歩く。三人で登校すること
はあっても、こうやって花音と二人きりということはあまりなくて、
正直自分もどこか居心地が悪かった。何か話題のネタを探して話を
振っても、その話題は数十秒でなくなってしまうって、またネタを探し
ての繰り返しだった。

「今日、いい天気だよな」

「うん、そうだね」

こんな感じに。いや、わかっている。こんなクソみたいな会話のネタでそんな長いこと間が持つわけがない。ないのだが、花音から出ている決意に満ちたようなオーラに当てられたせいか、全くと言っていいほど頭が働かないのだった。

結局話すネタなんて思い浮かぶこともなく、花音から話題が提供されるなんて幸運もなく、気がつけば川沿いの堤防、すっかりピンクの桜の散って緑の葉だけになってしまった桜並木の下まで歩いて帰ってきてしまっていた。それでも花音から出るその独特な雰囲気は終わることがなく出続けていて、あまりにもその居心地の悪さに俺のメンタルは限界を迎えてしまった。

「……なあ、花音。話つてき、なんだよ」

これ以上はない、今までの疑問を単刀直入に聞いた質問。これだけが本当は聞きたかったのだ。今日の天気の内容など本当にどうでもいい、これを聞くために必要な心の準備でしかなかったのだから。

これを聞いた瞬間花音の表情はまた一段と翳りがさして、どうしようもない申し訳なさともどかしさが一層募るばかりだった。

「話、というか聞きたいことかなあ？」

「……聞きたいこと？」

「この間、この下の道で女の子と帰ってたよね？」

「……この間」

ここ数日の中で、この付近の道を歩いた記憶を掘り起こす。この堤防の下の道の住宅街で誰か女の子と一緒に帰っていたことと言えば、思い当たることが一つあった。

「……ああ。あの時かな」

「えっと、聞きづらんだけど、その子はどういう子なのかな……？」

「まあ、クラスメイトだけだ」

不安そうにこちらを見上げた花音にたじろいってしまったが、別にあって隠すようなことでもないのでありのままに話すことにした。

「クラスメイト？」

「そう。なんか一緒に帰ろうって言われたからさ」

「そっか……」

「それで、告白されたからどうしよかなって」

「……えっ」

「だから告白されたからどうしよか返答を悩んでるって」

聞こえなかつたのか、それとも驚きの声をあげたのか。告白の事実を二度も言ってから感じたのだがこれを花音に言うのはどうなんだろうか。花音なら俺がどうすべきかも知っているのだろうか。

「……つまり、まだ返答してないってことだよな？」

「ん？ まあ、うん、そうだな」

そう答えた瞬間、突然花音は俺の手を取り、強く握った。驚きのあまり俺は花音の顔を見つめたのだが、花音の顔は覚悟に満ちた表情をしていた。

「ねえ。私ね。幼馴染、やめたいな」

「……は？」

花音はそのままよく分からないことを言い始めた。幼馴染をやめる？ どういうことだ？ そんな疑問に答えられるほど俺の脳内は整理されておらず、ただ花音の険しい表情を見つめることしか出来なかった。

「……どういう」

「私ね、楓くんと小さい頃からずっと一緒に。迷惑も沢山かけたけど、楽しい思い出がいっぱいで、ずっとそれで良いと思ってたの」

「……うん」

「私臆病だから……。それがずっと続けばいいと思ってた。怖かったんだ」

「一体何が」

言いたいんだ。そう聞こうと口を開いた瞬間花音はこっちに向き直ってより一層俺の手を強く握りしめた。

「楓くん、大好き。私嫌だよ、楓くんが他の人と一緒になるところなんて、見たくもないし、想像もしたくないよっ」

「……花音」

「だから……だから……私じゃだめかな。ずっと私、幼馴染に逃げ

ちやつたけど、これから恋人として、そばにいちやだめかな」

花音の真剣な告白は、俺に少しの戯言も許すことなく、俺の心を一心に撃ち抜いてきた。花音の淡水色のサイドテールが、揺れることなく止まって見えた。

「花音、俺は——」

「んっ……」

唇に柔らかいものが触れた瞬間、何も考えられなくなった。一瞬で視界が埋まりきった。自分がキスをされたのだと分かったのはしばらく経った後の事だった。

「……これが、私の気持ちだよ」

「ああ」

「もしね、楓くんが私の気持ち、受け止めてくれるなら今日の夜私の家に来て欲しいな。……うん。それじゃっ」

花音は甘い残り香と柔らかな感触だけを残して、走り去ってしまった。後に残された俺はその後ろ姿を追うことなんて出来るはずもなく、ただ呆然と、自分に何が起きたのかと、心を落ち着かせることだけで精一杯だった。

第5話 楓の返答

芸能事務所の窓から眺める街はすっかり暗く錆びて、明るいのとは等間隔に並ぶ窓からのほつりと漏れた灯りだけだった。初めてのライブに向けた最終調整、といつても私たちPastel?Paletteが舞台の上ですることなんてMCぐらいしかないのであれど。

「お疲れっ、千聖ちゃん！」

「ええ、また明日ね、彩ちゃん」

無機質なミーティングルームの扉が閉まる音が響く。廊下から聞こえていた彩ちゃんの足音も聞こえなくなって、伸びをした私は窓際の椅子に腰掛けた。ただ一人そんな無機質な部屋に残る私の考えることといえば、既にみんな帰ってしまったPastel?Paletteの活動のことだけであった。

数日後に迫ったライブも、当てフリだけの空虚なデビュー。私たちはライブに来てくれたお客さんを騙すだけの詐欺師でしかないのだ。正直に言えば、私のモチベーションは過去最低と言っても良かったかもしれない。

「……………わっ。楓？」

窓の外の街を見下ろしていると不意に持っていたスマホが振動する。どうやら電話が来たらしく、その画面には『楓』の文字だけが表示されていた。

「……………もしもし」

『あつ千聖。今大丈夫か？』

壁にかかった時計の針は6時10分を指していて、私は肯定の返事をする。確かマネージャーさんと話があるのはあと数十分後だったはずだ。

「それで、急に電話なんて珍しいわね」

『まあ、用事があったんだよ』

「用事って何かしら？ 私も忙しいのだけれど」

本心では嬉しいはずなのに、それを悟られたくなくてあえて素っ気ない対応をしてしまう。こんなところでも、私は仮面を被って演じて

しまう女優なのであった。

『へえへえ忙しいところにすいませんね、と。それで相談なんだけどもさ』

「相談……？ 何かあったの？」

楓の口から相談なんて言葉が聞く日が来るなんて、私はそんな呑気なことを考えてしまっていた。だからだろうか、楓の言葉を聞いて、すぐに意味が分からなかったのは。

『花音から、告白された』

「……え」

急に私の視界は黒く覆われて、外の宵闇に紛れ込む。スマートフォンを出す振動が私を揺さぶって、闇の底へと叩き落とした。

花音から、告白された？ その文字列だけがひたすら私の脳内を反芻して、いやがおうにも私に残酷な事実を叩きつけた。

「そっか……」

花音が珍しく楓のことを話した、羽沢珈琲店でお茶をしたあの日。あの日の花音の言葉はやっぱりそういう意味だったんだ。花音の背中を押したことに後悔はない。後悔はなかったつもりだけれど、アイドルに恋愛はご法度だなんていう堅くて頓珍漢な理屈で自分を半分納得させたふりをして、自分の気持ちを抑え込んだ自分が、今だけはとてつもなく憎かった。

辛い。胸が内側から食い破られるように痛い。けれど、何か返さなくちゃいけない。楓の答えを聞かなくちゃいけない。そう思って、無理やり腹の底から息を絞り出した。

「それで……どうするの？」

『俺さ、受けようと思うんだ。花音の告白』

「……そう」

私の儂い初恋が砕け散った瞬間だった。こんなにも無常なのね、恋が終わる瞬間って。けれど不思議と嫌になるくらい客観的に恋敗れた自分のことを眺めていた。

『けどさ、花音と関係性壊すの怖いんだよ』

「……ええ」

何もかも掠れて聞こえる。相談なんて聞きたくなかった。

『微妙な距離感とかなんねえかな、大丈夫かな』

知らないわよ。自分で考えなさいよ。

『……？ なあ千聖、聞いてるか？』

「白鷺さん、お疲れ様です」

ノックの音とともにマネージャーさんが入ってきた。咄嗟に窓に映った自分の顔を澄ました顔に戻して、スマートフォンに視線を戻す。

「……大丈夫よ、きつと」

『うん、だよな。ありがとな千聖』

「……ええ」

ぴつ、と力なく通話を切る。私だつてこの燃え上がるような恋の気持ちや楓に伝えたかった。伝えることが果たして許されるかどうかなんて分からないけれど、それでも願わくはこの恋が叶って欲しかった。

けれど私は白鷺千聖だから。Pastel? Palettesの白鷺千聖だから。そんな淡くて儂い気持ちはさつきまで黒いガラスに映った悲壮な顔と一緒に霧散させた。仮面を着けようにも、酷く落ち窪んだこの顔を隠せる仮面などなかった。

どうして、私に相談なんてしたのよ。

夜の住宅街を足早に行く。花音に返事を告げに行くためだった。

俺がずつと気がかりだった、今の心地よい距離感を壊さないかどうかの不安は、千聖の言葉で一気に掻き消されてしまった。

ものの5分も歩けば、新しめの一軒家にたどり着く。ぼんやりと街灯に照らされた表札には『松原』の文字が刻まれており、その隣の呼び鈴をそつと押した。途端にドタドタと音がして、玄関の扉が開く。

「……えへへ、待ってたよ、楓くん」

「花音」

石段を降りる花音のサイドテールは縦に大きく揺れていた。それに見惚れているとすぐに触れられる距離に、花音はいた。

「……返事が欲しいな」

「花音、俺は」

ゴクリと生唾を飲み込んだ。告白つて、こんな緊張するのか。花音の不安げな瞳が俺をじつと見つめていた。

「俺、花音のこと、好きだ」

「……うんっ、ありがとおっ」

花音の目は閉じた瞬間、大粒の涙が溢れていた。勢いよく体重を預ける花音の肩をそっと抱き留めた。

「楓くんっ、私も大好きっ!!」

恐らく嬉しさからきたであろう花音の涙は温かいまま俺の羽織る上着に染み込んでいく。花音の柔らかな体を、俺の腕が全て包み終えた。逆に俺の背中では花音のか細くて折れそうなほど華奢な腕によって包まれていた。けれど、その腕は不思議と力強かった。

「ん、ありがとな、花音」

俺がそう短く礼を返すと、花音の腕の力は一瞬強くなったが、やがて抜けてしまつて俺の体に引つかかるだけとなつてしまつていた。花音の頭は俺の胸へと完全に埋められてしまつていて、髪の毛の一本一本が見えるほど近くにある淡水色の頭をそっと撫でた。

「……ふふ」

「……ん」

撫でられたからか、やたらと上機嫌な花音は首を上げて、透き通るような瞳が俺の目を刺した。純粹無垢なその視線は心の奥底まで貫いてくるにいたつた。

どれほど見つめあつたか分からなかったが、まるで俺たちは予定調和の如く導かれるかのように、深赤の誓いを立てた。触れなさそうで触れるような、微妙な距離を楽しむように、唇は重なり合った。

第6話 千聖の高揚と落胆

いよいよ当日を迎えたPastel? Palettesのデビューライブ。舞台袖からこっそりと観客席をちらりと見たが、一部分しか見えないにしろ大量のお客さんが見えた。直に見えないだけで、その大観衆の熱気は、少し離れた舞台袖にまで伝わってきており、それを感じ取った彩ちゃんは緊張に震えていたのが一目瞭然だった。……なんて冷静に分析できる余裕は私にもなく、かくいう私自身も震えが止まらなかった。

「あっはっは、彩ちゃんおもしろ〜い！ ブルブルしてる〜！」
「だ、だっつてえ……あう」

変な胸騒ぎがするのは、私がここまで震えているからであろうか。胸騒ぎというよりも、何かを私は恐れていた。私にとっては、最早目の前にあるライブのことなんて眼中にもなかった。頭に浮かぶのはただ楓のこと、そして花音のことである。その二人が私のことを掻き乱して仕方がなかった。

「千聖さん、大丈夫ですか？」

「……ん、ええ、麻弥ちゃん大丈夫よ。ありがとう」

けれどステージに出たら私は、白鷺千聖、白鷺千聖、でしかない。Pastel? Palettesの白鷺千聖、アイドルなのだ。天才子役として名を馳せた私がこのアイドルというステージに呼ばれたからには、そのアイドルという仮面を外してはならない。私がこれを外すことなど許されない。

「大丈夫ですっ！ ブシドーの心で乗り切りましょう！」

「ふふっ、ありがとうイヴちゃん」

私にとつてのPastel? Palettesってなんなのだろうか。

なぜ私はアイドルを、ひいては芸能人なんぞやっているのだろうか。どうして楓の隣にいるのは、私じゃないのだろうか。

そんな決して外に出すことのできない疑問を抱えたまま迎えた初

ステージは、突然、音が止まってしまった。機材トラブルで音源が止まってしまったのだ。当然の如く口パクや当てフリなんてバレてしまい、私たちの初ステージは失敗に終わった。

久しぶりに3人で向かう学校。あの忌々しいライブから一夜明けで、ネットではPastel? Palettesは大炎上し、私たちの活動の中止が決まった。まあこのこと自体はやむを得ないだろう。あれだけ批判されている中で活動を続けるなど無策がすぎる。私とてこんな中で活動したくはない。それどころか私の役者人生にこれ以上泥を塗るぐらいならいつそアイドルなんて辞めてしまいたかった。

本音を言えば学校になんて行きたくないし、楓や花音と顔を合わせたくもないし、ずっと家で静かな時間を過ごしたかった。しかしそれを許してくれるわけではなく、諦めていつもより早い朝の時間に家を出ると、私の足は無意識のうちに楓の家に何故か向かっていた。

何故だろうか、惰性でついつい起こしにきてしまったのだろうか。こここの役目はこれからは花音の役目であるだろうに。

「……楓、起きなよ……ええ」

「おはよう、千聖」

部屋の壁にかかるアナログ時計はまだ朝の6時半を指している。いつもであれば楓が起きているはずがない。

「どうして……、今日は、早いよね」

「千聖が、来てくれるかなと思ったからさ」

「……えっ?」

私に来るから、どういうことだろうか、すぐには分からなかった。けれど、私の鬱々としたその気持ちは次の楓の言葉で一転することになった。

「……ライブ、お疲れ様」

「……うん」

「……こっち来いよ」

「え」

「いいから」

楓に言われて、私はゆっくりとベッドの方に歩み寄る。

「あつ……」

「……頑張ったな」

「……うん」

なんでそんなに優しくするのよ、貴方には花音がいるでしょう、なんて到底言えるはずがなかった。私のしようもない、ズタズタにされたプライドや、世間からの目で傷ついた私の心はあつという間に潤わされてゆき、枯れ果てたと思われた心は一気に水が通ったのだった。

温かい。楓の抱擁は言葉に言い表せないほどに温かく、優しいものだった。何を言うでもなく、こいつは、私が欲しいものをこれでもかと言うほどにピンポイントでくれたのだった。けれど、それは私にとって毒でもあつて、白鷺千聖、にとつても毒であった。そして、それでいて、先を悩む私に何か道を差し伸べてくれるわけでもなかった。

「……俺が、千聖からPastel? Palettesの話初めて聞いた時何言ったか、覚えてるか？」

「確か……、『とりあえず頑張れ』、とかだったかしら？」

「……ああ。そうだな。俺にはアイドルのこととか、苦労とか詳しいことはやっぱり分からないけどな」

「……そうでしょうね」

そうでもなかったら、『頑張れ』などという無責任な言葉がどうして出てこようか。少し憎らしく思えるのに、どうしてか私の目は、斜め上を見上げて言葉を探している楓の、淡い瞳に釘付けになってしまっていた。

「俺はさ、千聖が直向きにアイドルに向き合ってる姿、好きだぞ」

「……………」

その『好き』って、私に向けていい言葉なの？ 貴方にとっての白鷺千聖は一体どちらの白鷺千聖なのかしら。私にはその問いに対する答えなど出せるはずもなかった。

「だからさ、まあ、やり切ってみろよ。アイドルをさ」

「……………」

溺れてしまいたいほど甘いのに、その甘さを堪能しようという頃にはどうしようもなく苦くなっている、そんなどっちつかずのままであるぐらいであれば、むしろいつそのこともっとはつきりと突き放して欲しかった。けれど、それを求められるほど、この生温い抱擁を拒むことが出来るほど私の心は穏やかではなくて、そんな不確かなものでも投げ所が欲しかったのかもしれない。

楓、貴方にとっての私って。貴方の望む私って。どうやったら私は、貴方の望む、私、になれるの？

そんな卑下しようのない馬鹿馬鹿しい問いに答えてくれるものなど、誰一人としていなかった。

第7話 千聖の失望

「チサトさん、今日も来ないですね……」

イヴちゃんの悲壮な声色に、私が歌詞とリズムを間違えたことで演奏の止まったスタジオの空気がまた一段と重くなる。日菜ちゃんは今すぐにでも『つまんなーい』って言い出しそうなほどに部屋の隅に視線を向けているし、麻弥ちゃんも返答に困ったような表情を浮かべていた。

Pastel? Palettesがあのライブでの口パク露呈事件から立ち直る為にはどうすればいいか。出した結論は、実際に演奏も、歌も、文句なしと言えるまでできるようになって、それをライブでファンの皆さんに理解ってもらおうしかない、ということだった。事務所の担当の方ともそういう方向で話が進んでいて、今は活動中止だけれど、各々がレベルアップしようと、スタジオでこれまでとは比にならないほどの鍛錬を全員が積んでいる……はずだった。

休憩時間にスマートフォンを開いて、千聖ちゃんとのメッセージを徐に開けた。舞台の準備で忙しいということは知っている。それでもPastel? Palettesのために

なんとか時間を作ってくれるとも信じている。それに、千聖ちゃんがこのメッセージを、『一緒に練習して、Pastel? Palettesを復活させようっ』というメッセージを見ていることは間違いない。けれど、けれども、千聖ちゃんは練習には全く来なかった。

「彩ちゃん? なーに見てるの?」

「あつ、えーと」

急に視界の端からずいっと日菜ちゃんが私のスマホの画面を覗き込んでくる。画面上部に記された『千聖ちゃん』の文字を見て、分かりやすいため息が聞こえてくる。

「なんで千聖ちゃん来ないのかなー」

「それは……きつと舞台が」

「あたしも詳しくないけど舞台のお稽古なんて10数時間ぶっ続けでやることなの? それもこここのところ数週間ずっと。まあPast

el? Palettesの練習に来たくないのは分かるけどさ〜」

「……白菜ちゃん?」

練習に来たくない? そんなワードに私の頭の中は真っ白になった。

「だってつままないでしょ? るんって来ないし、千聖ちゃんが来たからって変わらないと思うけど」

「白菜ちゃんっ!!」

そんなこと言わないで。私の大好きなPastel? Palettesのこと、つままないなんて、言わないでよ。私の大声はスタジオの壁に反響して、程なくしてドアがパタリと開いて、閉まる音が聞こえた。

あのライブの痛々しい失敗から早いもので数週間が過ぎようとしていた。この頃の私は何事にも身が入っていないように感じられる。

原因は分かっている。Pastel? Palettes、そして何より楓のことだった。ライブの失敗だって、勿論機材トラブルなんて私のせいではないのだけれど、今思えば楓のことでライブどころではなかった私の心の弱さ故なのではないかと疑ってしまう。楓に励ましてもらってもなお、Pastel? Palettesの白鷺千聖という存在は自分にとってあって良いものなのかは悩ましかった。けれど、一人の少女の白鷺千聖としての存在はあまりに満たされていなくて、いや、満たされていないというよりもそれまであったはずのものが欠けてしまったというのが正しいのではあるが、そんな自分が惨めでたまらなかった。そんな私に最早残された確固たる己が存在しているのは、女優としての白鷺千聖だけであった。

「私はっ……私は……」

「カットツツ!!」

「……え?」

自分では完璧で、行間を見るものに感じさせられるような演技がで

きていたと思っていたはずが、それは幻想であったことを監督からの鋭い声で悟った。思わずセットの方からその声の主を恐る恐る振り返ると、険しい顔つきを隠そうともしていないようだった。

「あのさあ白鷺君。アイドル？　　かなんか始めて浮かれてるのか知らないけど、そんなにソワソワして集中できないんだったら辞めたらどうだい？」

「え……そんな」

アイドル。今の私が一番聞きたくない言葉だった。その話が出た途端現場もソワソワしているように感じられる。まるで、あの時、ライブの舞台でPastel? Palettesの化けの皮が剥がされた時のような、後ろ指を刺されるような好奇の目と、監督さんからの詰るような目線で、何も考えられなくなってしまった。

「はあ……。白鷺くん！　やる気ないならもう帰っていいよ！」
「え……」

「すみません。うちの白鷺が、体調不良で、申し訳ありません」
「全く、マネージャーならしっかりタレント管理しといてよ」

だからこそ、そんな唯一残された道である芝居で見捨てられてしまった自分に価値など見出すことはできなかった。自分ではその演技に何か問題があったとは思えない。あの監督と馬が合わなかっただけだ、なんて言い訳をするのだが、それでも稽古でこっ酷く叱られたという事実だけは拭いようがなかった。頭を代わりに下げてくれるマネージャーと監督さんの声が走馬灯のように脳裏を薄くよぎっていた。

それから、そんな暗い気持ちを抱えながら雨の地下鉄で事務所へと向かっていた。もう梅雨に入っていて、天気予報では明日は珍しく晴れるというのに、なんで今日という日に限ってこんなにも強い雨の中、舞台のお稽古で叱責され、挙げ句の果てにずぶ濡れにならないければいけないのか。これから事務所に向かわなければならぬというのに。

事務所に向かうといつても、別にPastel? Palettesの練習に行くわけでもなく、ただ惰性で、呼び出されたから向かつて

いるだけだった。彩ちゃんから毎日のようにメッセージが来ているのは当然知っている。けれど、通知が来るたびに私は、その通知を見ないフリをしようとしていた。今日だって地下鉄に潜る少し前に、ピコンという情けない音と共に画面が光っていたのを確認していたばかりだった。

いつもの如く持ち前の迷子癖は私の意思と関係なく発揮されてしまつて、生憎人の波に流されているのであるが、私の心はそんなことも気に留めないほどに疲弊していたのであつた。

「迷子癖……か」

こんな時花音が居てくれたら、なんて考えが不意に脳裏を過つて、慌てて掻き消す。そもそも元を辿れば今の私の精神的不調は、花音がその一端を担つてもいた。いや、花音は悪くない。私の親友が、悪いはずがなかつた。悪いのは自分の素直な気持ちを抑え込んで、愛する人の前ですら仮面を被つてしまった私なのに。あれから全てが狂つていったのだから。

ああ、自分が嫌いだ。天邪鬼な自分のことが。愛する人に素直に愛を伝えることができない自分が、それに踊らされて無意味な毎日を過ごす自分が嫌いだ。そんな私を耐えがたい慈愛で迎え入れ、嫉妬の炎を私に燃やさせる彼が嫌いだ。

狂おしいぐらい、好きだ。

「楓……」

苦虫を噛み潰したようなこの醜い顔は、荒れ狂う人群れの中ではきつと誰にも見られることはなかつた。だつて私の偽りの仮面は、愛する人にさえ見破られなかつたのだから。

第8話 楓の約束と千聖の絶望

梅雨の入りには珍しく晴れた日。俺は駅前の噴水手前のベンチに座り、一休みしていた。駅前を歩く人たちはみなよそ行きの格好をして、駅に次々と入線してくる電車の方へと向かっている。

「あつ楓くん、お待たせ！」

「おう、かの……おお」

「えっ、ええ？」

今日は花音とデートの約束をしていた。告白されて付き合ったはいいものの、碌に彼氏彼女らしいこともせず、ただ学校の行き帰り手を繋いで歩いていたぐらいの、初心なカップルをしていた。花音は俺にとつて幼馴染の延長線、ということもあつた、はずだったのだが。

普段見る制服姿とは打って変わり、髪色と同じ色のワンピースに身を包み、その開いたところから覗く首筋には急いで来たのであろう証がたらたらと光を反射して煌めいていた。それすらも普段あどけなさを感じさせる花音に艶やかな雰囲気を加えていた。端的にいうと、素晴らしい。

「えっと、楓くん？」

「ああいや、ごめん、なんでもない。それじゃ行くか」

「うんっ！」

なんとか脳に浮かんだ劣情的な煩惱を押し殺して悟られないようにして、花音の手を取って歩き出す。

「……えっち」

だから、ぼそつと耳元で呟かれた甘い吐息は、俺の心臓をえらく飛び跳ねさせた。

「ふう……今日も暑いね」

隣を歩く花音の額には暑さを象徴するような汗が垂れている。こちらを見上げる花音の上目遣いに心が奪われながらも、疲れたであろう花音を労うためにどうしようかを考えた。

「だな……。そろそろ疲れたからお昼食べるか？」

「そうだね、食べたいものって、あるかな？」

時計の針が12を過ぎた頃に、花音から問いかけられた俺は食べたものを思索し、それが食べられるお店を調べる為にスマホの地図アプリを開いた。検索の枠に考えられたファストフード店の名前を打ち込むと、赤いピンが地図上に刺される。

「……よし、ここ行こうか」

「うんっ、……あれ？」

花音は少し思うところがあつたようだが、すぐ近く、徒歩3分ぐらいのそのお店に向かって歩き始めた。

「……やっぱり」

「花音、どうかしたのか？」

「ここ私のバイト先」

「え？」

目の前に聳え立つ赤い看板のお店は、どうやら花音の口からたまに聞くバイト先だったらしい。

「あー、そうだったのか。店変える？」

「ううん、大丈夫」

全く意図していなかったが、それでもたまの休日にバイトを思い起こさせる場所に来てしまったって申し訳なさに浸っていると、花音が俺と繋いだ右手を引っ張り上げた。

「ほら、行こう？」

手を引かれるままに自動ドアの先に進む。お昼時のファストフード店は案の定人の入りはすごく、注文カウンターの人行列の奥では制服を着た店員さんが明るい髪を振り回して忙しそうにしている。

「んじゃ、俺が注文してくるから、席取っというて」

「え、でもお金が」

「いいんだよこれぐらい、何食べるんだ？」

「えっと、じゃあポテトのMサイズとウーロン茶を」

「りょーかい」

流石にデートということもあって、これぐらいは見栄を張らせてほしい。まあいっぱしの高校生程度の見栄では情けないことは否めな

いが。花音を席に向かわせて、俺は先程の行列の最後尾に並ぶ。そこから店を埋め尽くさんとするほどの行列に並んでいると、ファストフード店と雖も、20分ぐらいかかって、漸く注文から受け取りが済んだ。お盆にはいっぱいのハンバーガーやらドリンクが窮屈そうに並べられている。

「と、花音は、ん?」

店舗の奥の方の座席の上から水色の髪がはみ出していたので花音がいることはすぐに分かったのだが、そのさらに奥の席、花音の座る対面の席のところから、ピンクというド派手な色の髪がはみ出ている。

「でね、聞いてよ花音ちゃん……、千聖ちゃんが本当に練習に来てくれなくて」

「うん……、大変だね、あつ、楓くん」

「よつ、持ってきたぞ」

俺が声をかけると二人はどうやら気づいたようで、このピンク髪の少女は俺を見て、わずかばかり赤く腫らした目を大きく見開いた。

「え? あれ花音ちゃん今日一人で来たんじゃないの?」

「あ、いや、えつと。紹介するね? 私の恋人の島崎楓くん」

「……どーも」

恋人と改めて口に出されると少しだけ照れ臭くて、けれどもそれを悟られるのは憚られて、頭をさっと下げる。顔を上げると、そのピンク髪の少女は少し気まずそうに周囲の客席を一瞥した。

「あつ……私は丸山彩です。よろしくお願いします」

「丸山彩ってパスパレの……」

千聖と一緒にアイドルグループの子だったか。確かにアイドルをしていそうな華々しい容姿をこのファストフード店の制服と帽で隠す丸山さんは、そのワードを俺が口に出した瞬間、分かりやすくその美しい顔に影を落とした。

「楓くん……その」

「ねえ島崎くん? 島崎くんも千聖ちゃんと仲良いんだよね?」

「えつ、まあ」

さつきこの座席の近くの時に聞こえた名前は、どうやら俺の聞き間違いじゃなかったらしい。千聖の名前を出した途端に、自分の周りの空気がガタンと冷えたような気がした。

「……ひぐつ、なんで、千聖ちゃん、パスパレの練習来ないのかなあ……？」

「……千聖が？」

「わ、わたし……もう分かんないよおっ……」

「ちよ、えっ」

「彩ちゃん?! えっと、一旦場所変えよう?」

俺が事情もわからず慌てふためく間に、どうやら先に話を聞いていたらしい花音がどうにか泣い始めた丸山さんを宥め、荷物を持って店から連れ出す。そこから向かった近くの公園はすっかり木々が緑になっでいて、ジリジリと日差しが降り注いでいたが、藤棚に隠れるように物陰になっているベンチに丸山さんを連れて、なんとか落ち着かせた。

「うう……ごめんなさい」

「それで、千聖と何があったんだ？」

「……私たちPastel? Palettesが今活動休止してるのは知ってるよね?」

Pastel? Palettesの活動休止。勿論知っている。ちやうど数週間前にそのことで千聖を慰めたばかりだったから。でもその時、俺は千聖が一念発起してPastel? Palettesを全力で頑張るように励ましたつもりだ。千聖がこれまでの演劇の舞台だけでなく、アイドルのステージで輝いてる姿が本当に綺麗で、好きだったからだ。だからこそ、なおのこと丸山さんの話と合わないような気がした。

「今Pastel? Palettesは復活ライブしようと、今度は本当に凄い演奏に心に響く歌で、復活しようとしてるのにつ、でも上手くないがなくてえっ」

「彩ちゃん、大丈夫だよ……、落ち着いて?」

「うん……うん」

花音は赤子をあやすように丸山さんの背中を叩き、なんとか話を続けられるようにしてくれているが、丸山さんの涙は引きそうにないものだった。丸山さんは振り絞るように言葉を紡ぎ出すが、その叫びは痛いほどに胸を打った。

「千聖ちゃん、誘っても練習来てくれなぐつで、ぐすつ……日菜ちゃんもパスパレつままないっでえっ！」

「……そっか」

千聖。こんなパスパレを、お前の居場所を愛してくれる人を悲しませちゃダメじゃないか。

「花音ちゃん……島崎くん……、わたしい……どうしたらいいのかなあっ」

「俺に、任せて」

千聖だって、俺の大事な友達だから。

「……え？」

「俺が、話つけてくるよ」

だから俺がなんとかしないと。そんな約束を取り付けて、ジメジメとした昼の時間が過ぎてゆくのであった。

なんとか忌々しい迷子癖を乗り切って芸能事務所にたどり着いた私は、担当の人から呼び出されて、小部屋に入った。既に先ほどからの雨のせいで服まですぐ濡れで、気持ち沈み続ける一方だった。

「あの……すみません。話って、なんででしょうか？」

頭の中ではつい先程の舞台の、監督からの叱責が嫌というほど反芻されていた。女優としてのプライドだとか、そんなものが全て壊れてしまいそうなほどに、心までズタズタになっていた。

「その、申し上げにくいのですが」

やけに焦らしてくる。早く家に帰ってシャワーでも浴びて、なんとか気分転換したいのに。

「以前決まったドラマの話、覚えているでしょうか？」

「あっ……あの、ヒロインをさせて頂ける予定だったあの？」

私が静かに野心を燃やしていたあのドラマ。アイドル業でタレントの顔に泥を塗った私が再起のためにかける、舞台ですら失敗してしまった私が、起死回生を果たすための、あのドラマ。

「……先方から、断りの連絡が」

「……えっ」

ああ神様。私はこれ以上、何を失えば良いの？

第9話 Reset

「千聖ー？ 起きなさいい」

普段は日光を浴びて煌めいている水色のカーテンも今日は朝陽を浴びることもなく、真つ暗な部屋の中で一人目を覚ました。下の部屋から母親の呼ぶ声が聞こえるが、今の私にとっては最早どうでもよかつた。

思えばこの数ヶ月、恐ろしいほどの速さで色んなことが起こつた。アイドルグループの一員になったり、ドラマのヒロインに抜擢されたり、親友の恋バナを聞いたたり。

……私は一気に全て失ってしまった。Pastel? Palette? Pastelsは活動休止、ドラマもその影響でオフア取消、そして花音を応援した結果……結果、楓も失つた。いや、こんな言い方はきつと良くないのだろう。元から私のものというわけではないし、それらのどれも仕方がないことだった。Pastel? Palettesの活動休止は機材トラブルさえなければ起きなかつた話だし、ドラマのキャンセルだつてそれがなければなんということはなかつたはずだ。舞台のお仕事だつて。……楓は。楓は。

私があの時、アイドルだからなんていうこれ以上ないほどにくだらない理由で諦めなければ、楓だけは私の傍にずっと、居てくれたのだろうか。

三人で朝、登校していた頃が懐かしい。今となつては、とてもじゃないが花音にも、楓にも顔向けできるわけがなかつた。

「……ん」

虚な視界が鮮明になる。枕元に置いていたスマホのブザーに反応したからだつた。画面に表示されていたのは。

「……楓っ」

楓からのメッセージ。そこには一言、『今日の晩、話せないか?』とだけ。

これだけで少しでも気分が晴れてしまう私はなんと単純なのだろうか。単純だろうけども……単純であろうが、私にとって、楓は、神

様に等しかった。仕方がないじゃないか。

唯一縫れる存在。けれども、今楓と会ったとして、私は何を話したらしいのだろうか。たわいもない雑談をするのか？ それともこの心に溜まって澱み切った思いの丈をぶつけて助けを乞うのか？ そのどちらも、まるでできるビジョンが見えなかった。

そんなこんなで葛藤をしていたのだが、答えは出せず、時間だけがただ無常に過ぎていった。家の前で犬の悲しい鳴き声があったような気がした。

あつという間にその日の晩になって、今も私は近くの神社の石段を登っている。先の楓とのやり取りで、静かなところで話したいと私が伝えると、楓からこの境内で会おうと持ちかけられたのだ。確かにこんな夜遅くともなればまるで人もいないし、社務所も離れていて人氣はゼロと言ってもいいほどであった。

楓と会うのはある意味では後ろめたかった。花音に悪いような気がして。けれども、花音が楓と楽しそうな日々を送っていることを想像すると、自分が情けなくて、花音のことが羨ましくて、……羨ましくて。

ぐちゃぐちゃに壊してしまいたくなくなった。そんな醜い考えを抱いてしまう自分も壊してしまいたかった。

「はあ……はあ……」

長い石段を登ることへの疲労なのか、はたまた己の過去の過ちを悔いている吐息なのか自分でも分からないほどに頭は沸き立っていた。きつと今の私を誰かが見たら、そこに『微笑みの鉄仮面』などという面影を見出すことはできないのであろう。

スマートフォン画面を見ると、19:00という時間表示の下に、『鳥居のところで待ってる』と、本当に短いメッセージだけがぼわんと光っていた。本当に……楓らしいメッセージだった。不器用な風に見える、実際はとても優しい。たった一年ちよつとの付き合いではあるけれど、私が見た楓とは、そんなヒトだった。

その優しさは、用心深い私がこうまで心を開いてしまうほどに無差

別で、麻薬の如き毒だった。

「もう……ちよつとね」

小高い丘になっていて、あと十数段登った角を曲がれば、鳥居の前まで最後の石段があるだけだった。その角の先に、楓は、私が今一番縋りたいヒトが、そこにいる。気がつけば私の視界はあたたかな涙に溢れていて、視界がぼやけている。角を曲がった石段の先、鳥居にもたれかかって木々の枝ばかりの空を見上げる楓がいたが、その姿もどこかぼやけていた。

「……楓」

「ん、よつ千聖。遅かったな」

呼吸を整えて、待ち人の名前を呼ぶ。長い石段は疲弊し切った私の体にはなかなか厳しかったらしい。楓は何も言うでもなく、ただ静かに佇んでいた。

私の目元がやがて乾くと、楓の姿をしつかりと捉えた。

……その瞬間だった。頭の中にここ最近の出来事が急に流れ込んできたのだ。

楓にアイドルになることを伝えたこと。己の気持ちを抑えて花音にアドバイスをしてしまったこと。初披露のライブが大失敗に終わったこと。女優としてすら上手くいかないこと。

……そして、楓を、自分が密かに、誰にも悟られないように愛していたヒトを失ったこと。

さつき絶えたとばかり思っていた涙は気づけば溢れており、その隙間から覗く楓も困惑しているようだった。私とてもう何が何だか分からなかった。

気がつけば心配そうに覗き込む楓を両の腕で抱え込んでいた。それを受け止めるように、楓は私のことを支えてくれていた。

「かえでっ、わたし貴方のことが好きっ。どうしようもなく駄目な私を陰で支えてくれる貴方が好きっ、ずっとアイドルだからって我慢してたけどそれじゃダメなのっ。花音も大切だから応援しただけどっ、やっぱり諦められないのよおっ！」

ああ、言ってしまった。言っちゃ駄目だったのに。けれど、我慢す

ることも出来なかった。

「……千聖」

「アイドルもダメ、役者もダメっ、もう私どうしたら……、私にはっ、もう、楓しかないのっ……あなたしかないの！」

一度吐き出し始めると、もう止められなかった。何もかも上手くいかない私にとって、ただ一本だけ垂れる糸に縋るしかなかったのだ。それほどまでに、私の心は壊れてしまっていた。きつと楓なら私のことをこの地獄から掬い上げてくれる。……そう、信じていたのだ。

ばっ。

だから、固く握りしめていたはずの手が、払い除けられたことをしばらく理解できなかった。恐る恐る顔を上げてみると、楓の顔は、震えていた。

「……冷静になれよ」

「かえ……で？」

「アイドルも、女優も、全部千聖が始めたことじゃないか」

「えっ……」

「約束したよな、最後まで頑張るって。……千聖、お前彩ちゃんとかの気持ち、考えたことあるのかよ？」

彩ちゃん……？ どうして彩ちゃんの名前が出てきたの？

怖い。怖い。怖い。楓が紡ぎ出す言葉をもう、聞きたくなかった。

「最後までやりきれよ！ お前は、一人じゃないんだから！」

どうして？ 私はもう……。動悸が収まらなかった。楓のことを恐る恐る見上げると、楓も少し息を整えて、言葉を探してるようだった。

「……それと、ごめん。千聖の気持ちには答えられない」

「……あっ」

嫌だ。聞きたくない。

いやだ。ききたくない。

いやだ、いやだ、いやだ。

いやだ……。

いや……。

「俺には、花音がいるから。だから、……ごめん」

「いやああああっつ!!」

ああ。もう何も分かりたくない。私は本当に全部失ったんだ。

楓のことも。

それを理解するのが怖くて、脳が全てを放棄しようとしていた。私は、もう……。

刹那、視界がぐにやりと曲がる。曲がるだけではなく、ぐるぐると回転し始めた。

……ああ、このまま、消えてしまえば楽なのに。全部全部壊れちゃえば楽なのに。ふわりと浮いた体は、ドサリと地の底へと落ちていった。

ああ、この世界って残酷なのね。

楓は残酷だった。けれども楓は悪くない。全て悪いのは私で、私は壊れて当然だったのだ。それでも楓は残酷だった。

……けれど、どうしようもなく、愛おしかった。

狂おしいほどに私は楓のことを愛していて、それは不変であった。

楓、私はずっと……、ずっと、貴方のことを愛しているから。

ああ……。

アイシテル。

R
E
S
E
T

第10話 千聖の懺悔と奮起

どこか遠くから私を呼ぶ声が脳内に響く。どこか愛らしさを感じさせるその声の反芻が私の頭から体ごと揺すったように、自分の意識が戻ってくることを実感した。

「……あれ、ここは」

白い天井、少しだけくすんだ白いカーテン。私が今いるのは病室らしい。そんな周囲の状況認識とほぼ同時に先ほどまで響いていた声が具現化した。

「千聖ちゃん!!」

「あ、彩ちゃん? それに……花音?」

「よかった……目を覚ましてくれてえ……」

私のベッドのそばにいた二人は目を涙でいっぱいにしており、すでに目尻から溢れ出してすらいる。まるで隠そうともしない涙声。……ああ、きつと私はこの状況から察するに、長い間病院のベッドで寝ていたのだろう。たしかに言われてみれば自分の足などに違和感を感じる。きつとその怪我らしき感覚もそれに関連することなのだろう。

……そう考えた瞬間に、急に脳内の神経が全て一瞬で回路を組み上げたように私の頭に映像が流れ込んできた。思わず頭を抱える。周囲からまた私を呼ぶ声がするが、そんな声よりも私がまず感じたのは謎の浮遊感だった。

『あつ……』

『え……』

足が地面から離れて、視界が星の溢れる暗い夜空でいっぱいになったと思えば、薄汚れた鳥居の石柱が視界の端でくると回った。……いや、そんなわけはなく、回っているのは私だった。落ちていく私の体は動かず、辛うじて動いた首を捻じると、やけにスローモーションで地面に、それも足の階段に近づいていた。けれど、私の体とその石段の間には……楓がいた。やがて私の体が地面に近づくまでの間にドサリと音がして、何か柔らかい感触がした。

……流れてきた映像はそれだけだった。少し呆然としてしまったが、ハッと気づき、この部屋を見回した。といつてもいるのはあわわわとしていいる彩ちゃんの花音の2人だけ。

「ねえ!! 楓は?! 大丈夫なの?!」

「わわわ落ち着いてよ千聖ちゃん! 楓くんは……」

急に表情に影を落とす彩ちゃん。花音は固く口を結んでいた。

「……まだ目を覚ましてない。頭を打ってるから、いつ目を覚ますか分からない……だって」

「そん、な……」

ああ、私の、私のせいだ。あの夜の神社で、私が、あんなことを聞いて、何もかも嫌になって、逃げ出そうとして、階段から落ちて、楓は身を挺して、私を庇ってくれたのだ。ああ、私がああとき。

「大丈夫だよ千聖ちゃん、千聖ちゃんは悪くないよ……」

急に私の冷たかったはずの手が温められる。視線を落とすと、小さくて温かい花音の両手が私の両手を包み込んでいた。

「……花音、ありがとう」

私は花音に精一杯の笑顔を返す。それ以上に返す言葉が見つからないし、そもそも私が花音にそんな言葉を返す資格があるのすら分らなかった。

「何があつたのか私には分からないけど、何より私は二人が無事で良かった……良かったよ……」

「花音、ええ……私は大丈夫よ」

全く説得力がないかもしれないが、私を励ましてくれる私の大切な友人に報いるために励まし返したくなったのだ。なぜ、なぜ私はこんな純粋な少女に醜い嫉妬の炎を燃やし、拳句の果てに孤独を嘆き、その炎に自らの身を投じてしまおうとしてしまったのか。……あの時、楓が励ましてくれた言葉が、どれも今の私の頭の中に響いていた。

「花音、ごめんなさい。……私、あなたのことを心の底から信頼出来ていなかったみたい。本当に……ごめんなさい」

「え、ええっ? 大丈夫だよ千聖ちゃん!」

無垢な太陽が弾けている。それだけで私の荒んだ心は潤いを取り

戻していくようだった。……そして、私が謝るべき相手がまだ他にもいた。

「それから彩ちゃん。……ごめんなさい。私、今までPastel? Palettesのこと、何も考えていなかったわ……」

「……うん」

彩ちゃんは神妙な面持ちで私の顔を捉えていた。……正直、彩ちゃんに対してどう謝ればいいのかも、分からなかった。どう言葉を紡ごうか、悩んでいると、彩ちゃんがゆつくりと口を開いた。

「千聖ちゃん、それじゃあまたこれから、……これから私たちと一緒にPastel? Palettesを頑張ってくれないかな? 私

……Pastel? Palettesを諦めたくない……。けど……何も良くななくてえ……。ひぐつ」

「彩ちゃん……」

ああ、そうやって言ってくれる存在がいてくれるだけでとても嬉しかった。なぜ今までの私はこんな大切な人たちのことを見ることでできなかったのだろうか。

なんとか動きそうな足を動かして、ベッドに腰掛けた状態になる。彩ちゃんがよくわからなさそうに目を拭う腕をどけた瞬間に。

「彩ちゃん……ありがとう。私、もう一回、Pastel? Palettesの1人になってもいいのかしら?」

「……うんっ! 勿論だよ!! うう……千聖ちゃん……」

「ふふっ、ありがとう。もう、そんなに泣かないの」

「だってえだつてえ」

泣き虫な彩ちゃんは私の胸元でわんわん泣いている。私にはこんなに大切な仲間がそばにいたのに。そんな大切なことを気づかせてくれた3人に心の中でもう一度感謝の言葉を考えると視線を上げた。

すると、隣に立っている花音と目が合う。花音は柔らかく、とても温かな眼差しで微笑んでくれた。

ついさつきまで冷たく、寒かったはずの部屋が、どこか温かみを感じる安らぎの空間になったのだった。

彩ちゃん泣き止んだあと、2人のお見舞いの労を労って見送ると、急にまた部屋は静かになった。私の身分のこともあつてのことか、完全に個室の病室となっており、自分の身に起きたことを整理するには、逆にありがたかった。

楓はどうやら同じ病院に入院しているらしく、すぐ近くの病室にいるらしい。先程2人がお見舞いに行った時には楓は目を覚ます気配すらまるでなかったらしく、その話を聞いた私の心は、まるで太い捻れた縄できつく限界まで締め上げられているようだった。

ベッドサイドには申し訳程度の松葉杖が置かれている。といつても痛むのは右足ぐらいで、左足に体重をかければ痛みも特になく立てるほどだった。

「……病室、行こうかしら」

楓が眠っている病室。自分の体が怪我しているということ差し引いても、やはり一番心配なのは楓のことであった。私のことを庇ってくれた楓。庇ってくれただけでなく、私をここまで前向きな気持ちにさせてくれたのだった。

細くて頼り甲斐のない松葉杖をついて、部屋から出る。やけに静かな病棟のリノリウムが松葉杖と触れて鳴る音が両耳を不気味に通り返した。幸い階段を昇り降りすることもなく、少し歩いて件の病室の前に着いた。どうやら私の関係していることだったせいで、ありがたいうちに楓も個室の病室が与えられているらしかった。

「ふう……」

少し、あの時のように息を吐いて、ガラガラと引き戸を開ける。窓のカーテンが開け放たれており、沈みかけの夕陽が部屋に差し込んでいた。そして、部屋の奥に無機質な白いベッド、そして。

「……楓」

話を聞く分には大怪我をしているはずなのに、楓の顔はまるで毎朝起こしに行った時のように静かに眠っているだけのように見えた。差し込んでいる夕陽は微かに楓の顔を照らし、まるで淡い光に包まれているようにさえ感じられる。そんな楓の顔を見て、安心するわけもなく、私がまず発した言葉は……。

「ごめんなさい……本当に、ごめんなさい……」

届くわけもない、そして、許されることのないにも関わらず抱いてしまう、そんな言葉だった。もちろんその言葉を聞いてピクリとも楓が反応するはずはなく、静かな部屋には反響することもなく私の声は消える。心の底から湧き上がってくる罪の意識はかつて体感したことのないようなものであった。

もはや自分の感情が一言で述べることはできないほどに私の心は混沌としていて、けれどあの時のように自棄になることもなく、なぜか冷たい空気に当てられて、やけに自分が冷静でいるような気がした。まるで空の上から自分とは違う自分を見ているかのような、そんな気持ちだった。

「……ありがとう」

そして……、本当であれば、もっと早くに伝えたかった、そんな言葉が不意に口をついて出た。今となっては遅かったのに。そんな後悔の念も、霧散させるしかないのであった。

どれほどの時間が経っただろうか。先程まで部屋に差し込んでいた陽光は消え、部屋の静けさが一層増した。時計を見ても、先ほどから時間はそう経っていなかったが、けれど、私にとってはもっともつと長く感じられた。

なぜだろうか。さっきまで混沌にいたはずの私の心は、根拠なんてない自信に満ちていた。そうだ、これは楓がくれた、チャンスだったんだ。……だから。

「ありがとう、楓」

決して届かない言葉を口にして、改めて楓の凜として、澄ました顔を眺めた。

「私、頑張るから」

何かに背中を押されるように、部屋を出た。コツコツと言う足跡は、遠くまで響いていたのだった。

第11話 各々の昏迷

あれから、実に2ヶ月ほどが経った。私は、楓からの言葉を胸の奥に大切にしまつて、またアイドル活動に邁進、いや、心をすっかり入れ替えてPastel? Palettesの一員になるべく歩み始めた。私が怪我をしていたことなどは、活動自粛の期間も相まって世間に知れ渡ることなく済んだ。

私は、今一度Pastel? Palettesという、私の居場所に真正面から向き合うことにしたのだ。彩ちゃんの直向きな心に触れた私は、このPastel? Palettesと一緒にまた復活しよう、そう誓った。そして、何事にも本気で、全力で向き合う、そう学んだのだった。

そうして、Pastel? Palettesは復活した。最初はみな、一度口パクに当てふりというアーティストにあるまじき行動をした私たちに見向きもしなかった。しかし大雨の中、復活ライブのチケットを売りしながら地道に誠実なアイドルになったことを訴え続けて、なんとかまたアイドルの道を歩んでいけることになったのである。もちろんそこでは私の力など微々たるものだった。むしろPastel? Palettesのみんながいたからこそ成し遂げられたのだった。

……けれど、私がこうやってめげずに頑張れたのは楓がいてくれたからだだった。楓が、あのとき私と本気で向き合ってくれたからであった。だから、私は楓が目を覚ました時、胸を張ってPastel? Palettesの白鷺千聖であると言えるように、がむしやらに厳しい芸能界を生き抜いてきたつもりだった。だから。だから……。

「あなたは……誰ですか？」

「……えっ」

私は、絶望した。

一つ一つ大切に並べたドミノが全て倒れ去るように。一瞬にして、全てが崩れ去っていった。

楓は、記憶を失ったのだ。

暫く楓の病室で呆然としていた。あの石段からの転落での怪我から目を覚ました楓は、今の状況がやはりあまりよく分かっていないらしく、顔の動かせる範囲で部屋の様子を眺めているようだった。どうやら何回か私にも声をかけられていたような気がするのだが、私自身でさえ今の状況を冷静に把握することが出来ないあまり、暫く反応することが出来なかったのだ。

「あの……あなたは？」

何度目かの問いかけに私はハツとして、楓の顔を見る。全てを飲み込まんばかりの純粹無垢な表情。かつてその甘さに溺れてしまった楓の姿にまたも溺れそうになりながらも、決別の意思を込めて、私は返事をした。

「私は……白鷺千聖。あなたの、友人、よ」

私はこの、己の成した罪と向き合わなければならぬのだ。

「友人……」

「ええ、あなたは私にとって大切な友人なの。……ごめんなさい、少し席を外すから、代わりに花音を呼んでくるわね」

「花音？」

「ええ、あなたの彼女、恋人よ」

それだけ言い切ると、白鷺千聖と名乗るそのプラチナブランドの少女はスタスタと部屋を出ていこうとする。振り返った瞬間に靡いたその髪がどこか憂いを帯びているような気がして声をかけようとしたが、何を聞けばいいのかすら分からず閉口しているうちに、ドアは閉まっていた。

閉まったドアを眺めて少し経っただろうか、急にガラリと音を立ててそのドアが開く。ドアの先に立っていた少女は走ってきたのか息が荒く、薄水色のポニーテールを跳ねさせていた。その少女は息を切

らしたまま俺のベッドのそばに駆け寄り、俺の肩は突然抱きしめられた。

「えっと……」

俺が何かを言おうとしても、その人は俺を抱きしめたまま離そうとしなかった。とても暖かい抱擁であったが、僅かながらの違和感を感じた。それはかつてその抱擁を体感したことがあったから故なのであろうか。その少女の抱擁は固く、けれど震えを持っていた。まるで何かに恐れているように、慄いていたのだ。

「楓くん……」

その少女が辛うじて発した声は俺の名前だった。おそらくさっきの千聖、が言っていた花音という少女が、彼女なのだろうか。すなわちこのヒトが俺の恋人――。

「楓くんっ、無事で良かった、良かったよお!!」

俺の中途半端な思考を遮るように劈く少女の声。その可憐な見た目とは裏腹にかなり大きく、響くような発声だった。しかしこれは……揺さぶられすぎて。

「あの……苦し……」

「あつご、ごめんね?! えっと……とにかく良かったあ……」

目覚めたばかりの体にはしんどい揺さぶりを伝えるとその少女はなんとか落ち着きを取り戻してくれた。先の千聖といい、その反応を見るに俺は相当長い期間眠りについていたらしい。

「それで……あなたが俺の、恋人……?」

俺が疑問形でそんな言葉を伝えると、その少女は徐にこちらの顔を覗き込んだ。

「えっうん、そうだよ? ……どうしたの?」

まるで見たくもない現実を恐る恐る確かめるかのようにその問いを投げかける少女ではあったが、俺は、その問いにはこの問いを投げかけるしかなかった。

「……あなたが、花音さん? ですか?」

「あ……」

時が止まったように静けさを取り戻した部屋、時が止まったよう

に、俺たちは互いの顔をただ無言で、どれだけの時間か分からないけれど、見つめ合った。その静寂を打ち破ったのはまたしてもドアの音だった。

「はあつはあつ……待って花音……まだ伝えられてないことがっ」

先程の千聖と名乗る少女、その少女もまた息を切らしてこの部屋に飛び込んできた。花音と呼び掛けられた水色の髪の少女は俯いていた顔を上げて、振り返った。振り返った時に靡いた髪の毛の隙間からこちらを除いたのは、その髪を体現したかのような哀しみの涙のようだった。

「千聖ちゃん……楓くんがあ……」

俺からしても、飲み込めない状況にどうすればよいか分からず、口を開くこともできなかった。おろおろとする俺を横目に、千聖は泣き囁る花音を抱きとめつつ苦虫を噛み潰したような顔を浮かべた。

「……ごめんなさい。貴方も落ち着く時間が必要でしょうし、じきにお医者さんもくるからそちらから詳しい話を聞いてくれるかしら？」
「あつ、はい」

「私たちも少し動転しているの、ごめんなさいね」

そして花音に肩を貸してなんとか立たせると、慰めの言葉をかけながら二人揃って部屋を出ていってしまった。それについて考える間も無く、続けて入ってきた病院の関係者との話が慌ただしく始まったのだった。

「ひぐうっ……うう……」

楓くんの病室を千聖ちゃんに支えながら抜け出して来た私たちは、病棟の端っこにある休憩スペースのベンチに腰掛けた。明るい緑色にふわふわのベンチはまるで惨めな私を嘲り笑うようだった。

「なんでえ……なんでっ」

止めどない涙を拭うでもなく自分の無力さを嘆いていた。千聖ちゃんは背中をさすってくれて、それでいてただ無言でいてくれた。

その優しさについて当たってしまいたくなくなってしまった私は酷いやつなのかもしれない。

「うう……」

「楓は、……多分だけれど記憶喪失になっているのね」

なんとか痙攣を起こす息が徐々に落ち着いてきた頃に、千聖ちゃんがゆっくりと口を開いた。記憶喪失。もちろん医師の診断をまだ受けたわけではないから確定はできないのだろうけど、その文字列を疑わないわけにはいかなかった。

楓くんが目覚めたと聞いて、一気に絶望の淵から這い上がったつもりでいた私の心は、一番会いたかったその人に会った結果、また絶望の底に叩き落とされたのであった。なんと惨めな話だろうか。約2ヶ月もの間楓くんの目が覚めるのを待ち望んだ結果は、ずっと待ち望んだ楓くんが、私のことを何一つ覚えていないという残酷な結果なのであった。

「……楓くんの記憶、戻ってくるのかな」

「ごめんなさい。私には……そこまで分からない」

千聖ちゃんに聞いても到底分かりようのないような疑問を投げかけてしまった。お医者さんに聞いてもいつ戻るかなんてきつと分からないだろうに。なぜ？ なぜという疑問が次々と、次々と私の脳内に溢れかえってきた。

……ああ、これは私は聞きたくなかったのに。けれど、この哀しみに侵された脳味噌は操り人形のような私の口に指示を与えてきたのだった。

「ねえ千聖ちゃん。……二人が石段から落ちた時、何があったの？」

途端に凍りついた空気。千聖ちゃんの顔も一気に強張った。ああ、やはり聞いてはいけなかったのだ。けれど聞かざるを得なかった。何かのせいにはしないと、自分の心を保てそうになかったのだ。

「……花音、ごめんなさい」

しばしの沈黙の後、千聖ちゃんはその言葉とともに深々と頭を下げた。その沈痛な言葉の節々から千聖ちゃん自身の悲痛を感じた私は、その質問をしたことを激しく後悔した。

「私、何も上手く行かなくなって、あの夜楓に助けを求めてしまった。……けれど……けれどっ、楓はっ……」

千聖ちゃんはその大粒の涙を必死に堪えようとしていたが、もはやそれを止めることは出来なかった。それに、私は千聖ちゃんを責めることなんて、出来なかった。

……それは、……もしかしたら、もしかしたら千聖ちゃんも楓くんのことが好きなんだって、ずっと前から覚悟はしていたから。

「私が自暴自棄になってっ、落ちそうになって、なったらっ、楓が私のこと庇ってえっ」

千聖ちゃんが紡ぎ出す懺悔の言葉を責めることなんて私には出来ない。責められるべきは私の方だったのかもしれないのだから。きつとこれは運命の悪戯だったのだ。神様が意地悪なだけだったんだ。

そして、悪戯好きな神様に泣かさされた私たちは、日が完全に暮れてしまうまで泣き合ったのであった。

第12話 楓の困惑

「その日楓くんが寝坊して、私もずっと待ってたら二人とも遅刻しちゃって。……覚えてるかな？」

病室のベッドの傍の椅子に腰掛け、花音がこちらを覗き込む。その顔には少しばかり諦めの色も見えていた。

「……いや、ごめん。覚えてない」

「……そっか」

花音の沈痛な声が漂う。俺が目覚ましてから実に一週間とちよつとが既に経っていた。花音は必死に俺が記憶を失う前の思い出なんかを語ってくれるのだが、残念ながら俺の記憶にはそのような出来事は全くなかったのだ。ここで覚えてる、なんて返しても嬉喜びさせるだけであるし、俺は正直に伝えることが憚られる事実を告げるしかないのであった。

「ごめんね、覚えてないのにいっぱい話ばかりしちやつて」

「いや、花音が謝ることじゃないから、いいよ」

今の花音の顔を見つめることなんて俺にはできなくて、視線を窓の外に動かす。部屋の中こそ冷房が効いているために空気が冷え切っているが、窓の外は熱気を感じさせるような、真夏の太陽に熱された空気ばかりに見える。今はどうしてだか、この冷え切った部屋にも、熱された外にもいたくなかった。

花音や千聖は俺が花音の恋人だとずっと言っているのだが、その事実自体はきつと間違いないことなのであろう。しかし、俺自身の感覚がその事実には追いついていなかった。むしろ、記憶の戻らない俺がいるせいで、花音のことを傷つけ続けているような気さえする。それはまるで花音を無意識の鎖に縛り付けているようで、記憶の戻らない己を責めることしかできないのだった。記憶を戻さなきゃいけないという焦燥感は、これ以上ないほどに味わいたくないものであった。だって、花音が必死に語ってくれる話は、記憶の全くない俺にとって、どこか遠い話にしか聞こえなかったのだから。

お互い全くの無言の時間が続く。その無言の時間にいることが居

心地悪いことこの上なくて、ベッドサイドに置かれたテレビのリモコンを手を取った。

『今を飛ばたく新人アイドルユニット！ Pastel? Palette
tesのみなさんですー！』

控えめに設定されたテレビの音として聞こえてきたのは千聖のいるアイドルユニット、Pastel? Paletteという名前。そしてその画面には華やかな衣装に着飾った少女が5人、映し出されていた。

「あつ千聖ちゃんたち、特番に出るって言ってたなあ……」

それまで静かであり続けた部屋に突然音を持ち込んだテレビに、俺たち二人ともが視線を向けた。

『ここで絶望のドン底から大復活を遂げたPastel? Paletteの皆さんの復活までの裏側を密着してみました！ VTRをどうぞ！』

テレビでは意気揚々とPastel? Paletteのあまりに華麗な復活劇が取り沙汰されており、その様はテレビの画面から観ている俺たちから考えても凄まじいものだった。

『白鷺さんはアイドル業をこなす傍ら、女優業でもご活躍なさっていますよね』

『ええ、そうですね。こんな私を使っただけで本当にありがたい限りです』

『そんな白鷺さんの1日のスケジュールがこちらです！』

MCの掛け声と共にスタジオの画面に千聖の1日のスケジュールが書き込まれた長方形が出てくる。朝の5時に起床、平日は学校に登校しながらも放課後から夜遅くまでレッスンに取材対応など、さらには出演している舞台の撮影やらと、過労で倒れてもおかしくないぐらいに予定がぎっしりと詰まっていたのだった。そんなテレビの画面を眺めながら、花音はほうとため息をついていた。

「……ごめんね、今日は帰るね?」

「ああ、次はいつ来るんだっけ?」

「えつと……こころちゃんから呼ばれてるから、結構先かな?」

「……そっか、花音もバンド、頑張れよ」

「うん、千聖ちゃんほど忙しいわけじゃないけど、頑張るね」

花音の背中が遠くなっていく。先程まで微かに温かかったこの部屋は、ドアが閉まった瞬間また寒くなってしまった。

「……暇だな」

どうやら俺は、別段見舞いに来てくれるほど親しい友人がいるというわけでもない寂しい野郎だったらしく、花音が学校の帰りなどに頻繁に寄ってくれるぐらいだった。しかし、そんな数少ない訪問も、花音の悲壮な顔を見てしまうと、申し訳なさとし苦しさに溢れてしまうのだった。……こんな状態が続くならいっそ。

ガラガラっ。

俺が暇を持て余して余計な思考に浸っていると、突然病室のドアが開いた。しかし、今回の訪問者は花音ではないらしかった。

「……千聖？」

「あら、元気かしら？」

先程までテレビに映っていた人間が今突然目の前に現れた違和感で、俺の視線は今は真っ黒になってしまったテレビ画面と千聖の顔を数度往復した。

「……何か私の顔についているの？」

「あ、いや、なんでもない」

「そう……それで、調子はどう？ 体とか、記憶とか」

千聖からの質問に窮した俺はしばし押し黙った。正直に言っただけがそんな突然戻るかなんて俺には分からないし、むしろ戻った方が良いのかすら分からない。体はまあなんとかリハビリを始めて軽く動かせる程度には楽になったのだが、きつと千聖も本当に聞きたいのは記憶のことなのだろう。

「……芳しくないようね。……ごめんなさい」

「……なんで千聖が謝るんだ？」

「いえ、なんでもないの」

「それで、人気急上昇中のアイドルは仕事で忙しいんじゃないのか？」
先程のテレビ番組ではこんなところに来る余裕がない程度には忙

しいようにしていたものだから、その辺りを問いただそうとしてみる。やけに嫌味な言い方になってしまったが、俺の感情が混沌としているせいでそんなところに構っている余裕はなかった。

「え？ 先週末ではたしかに寝る時間もないぐらい立て続けにお仕事があつたけれど、少し時間が出来たからお見舞いに来ただけなのだけれど」

まるで嫌味をそっくりそのまま返すかのような返事。しかし、ある意味記憶を取り戻そうと焦燥に駆られていた俺の気持ちはこんなやり取りで意外と静まったのであつた。

「……ありがとう。まあ、生憎見舞いに来てもらっても、多分面白い話は何も出来ないよ」

そりやあこちとら病院に鮎詰め状態。それどころかその病院に至るまでの記憶は一切ゼロ。話せることなんて、花音のことぐらいしか。……こんな話、千聖にしたって仕方がないだろうに。そんな惨めな気持ちを隠すために、わざとさつきから俺は嫌味な言い方をするのかもしれない。

「そう」

千聖は短く返すと、徐にさつきまで花音の腰掛けていた椅子に腰を下ろす。そこから見下ろされる千聖の目線は、どこか先程の花音の眼と同じような、悲しい色をしていた。

「……りんご剥いたら食べる？」

「えっ」

「りんご、食べられるかしら」

「あつ、ああ……」

小さく会釈を返すと、千聖はりんごの皮を慣れた手つきで剥き始め、あつという間に小皿に切ったりんごを盛り付けた。

「はい、好きな分だけ食べなさい」

「……ありがとう」

先程まで感じることでできなかった温かな優しさが妙に新鮮だった。しゃくりと音を立てて口の中で崩れるりんごのおかげで、心はひとときの安らぎを得たようだった。まだ夏の真ん中で旬よりも少し

早いはずのりんごは、どこか爽やかな風味がした。

「忙しいのにわざわざ来てもらって、ありがとう」

まだ食べ終わらないうちに、ふと湧き上がってきた言葉を千聖に告げる。それまで黙っていた千聖は驚いたようにこちらを見たが、またその顔に翳を落とした。

「いいのよ、償いなのだから……」

「……償い？」

「……いいえ、なんでもないわ。ごめんなさい、りんご全部食べられそうかしら？」

「え、まあ、うん」

千聖はまるでこれ以上の話を拒むように背後の窓に振り返り、外をぼんやりと眺めていた。そのどこか愁いを帯びた表情と、靡いて陽光を反射させた金の髪に見惚れてしまう自分がいたのだった。

第13話 花音の落胆と楓の傾動

急がなきゃ、そんな焦りが私の心を背後から追い立てる。どうして楓くんはかつての記憶を思い出してくれないんだろう、というもどかしさが私をせき立てていた。最近ハロハピの活動が忙しくてこの病院にもなかなか来ることが出来なかった。そんな色んな想いが混ぜこぜになったまま、あの白い病室のドアを開けた。

「楓くんっ」

やはり冷房が効いていて、涼しすぎるほどの病室のベッドの淵に腰掛けている楓くんに声をかけると、楓くんはゆっくりとこちらを見上げた。

「ああ、久しぶり、花音」

「最近来られなくてごめんね？ 体調はどうかかな？」

いつかの私はずっとしていたようにベッド側の椅子に腰掛ける。少し冷たく、無機質な椅子だった。涼しい部屋も相まって、私の心は氷漬けにされたように痛んでいた。

「体調は……まあまあ」

「そっかあ、記憶は、どうかな？」

訊きたくて仕方がなかったこの質問、半ば戻っているはずがないと分かりつつもつい訊いてしまった。だってそんなこと、この反応を見れば分かりきったことなのに。

「…………ごめん」

「そ、そっか。気にしないでね」

私がそう答えると、また沈黙がやってきてしまった。何を話したら良いのか分からないのだ。楓くんが記憶を無くす前であればその日あった面白いことだとか、そんな取り留めもないことでも話して笑い合えていたはずだったのに。そんな後悔をしても最早後の祭り、今はただ楓くんが記憶を取り戻せるようなエピソードをなんとか振り絞って捻り出すしかないのであった。

「あつ、桜が散る頃に河川敷を2人で一緒に歩いた時のことなんて覚えてるかな？」

正直楓くんと付き合いだしてからのことは殆ど全て喋ったような気もする。幼い頃の記憶も印象に残っているような話はいっぱい話した。けれど、楓くんにはそのどれもが分からないみたいで、かつての戻らない過去を話せば話すほど無性に虚しくなるだけだった。

「いや、覚えてないかな……ごめん」

「そっか……、うん、仕方ないよね」

かつて感じたことのないほどのもどかしさを味わった。私がこれまで一緒にいた楓くんの姿が、まるで波風に削られる砂の城のように徐々に崩れ去っていくようだった。一度崩れ去っていったその城は、どんどん見る影もなくなって、周りの何の変哲もない砂に変わっていった。しまいそうだった。楓くんの心が波に押し流されてしまったように、遠ざかっていくような気がした。

「……うう」

「……花音？」

「……ううん、なんでもないよ、えへへ」

そのあまりの無情感に涙が溢れそうになってしまった。咄嗟に楓くんから視線を逸らして顔を隠した。この秘密の涙は楓くんに知られていないだろうか。

戻って欲しいのに、またあの時のようにそっと優しく抱きしめて温かな愛を注いで欲しいのに。そんな理想と相反する無慈悲な現実が突風となって脆い城をどんどんと壊していく。潮風のようなしよっぱさが、この真っ白い箱庭にいやに沁みただった。

ドアの外からコツコツと言う足音が聞こえてきた。その足音からはその足音の主が歩いているわけではないことが容易に伝わってくる。ああ、またあの時間が来たのかと、辟易してしまう自分が一番嫌で堪らなかった。

当初の予想通りガラガラと引き戸の開く音がする。このドアの開け方にはデジャビュを感じた。

「楓くんっ」

息を切らして駆け込んできた花音。急いできたことを如実に物語る額の汗を見ると、頭のどこかが割れるように痛くなり、少しだけ視線を花音から外した。

「ああ、久しぶり、花音」

「最近来られなくてごめんね？ 体調はどうかな？」

ああ、またこの質問がされるのか。一時期来なくなった花音が、その前も繰り返してしてきたこの質問。きつと俺がどのように返そうとあの質問が飛んでくるのだろう。

「体調は……まあまあ」

「そっかあ、記憶は、どうかな？」

その質問が花音の口から発された時、ああまたか、という感情だけが俺の心を支配した。しかし、その何度も繰り返されたこの質問を目力の籠った真剣な眼差しで投げかけられると、いい加減に答えることは許されないのだろう。

「……ごめん」

とどのつまり、こうやって謝ることしかできないのだ。落胆に暮れる花音に罪悪感を抱きながら、ただどうしようもないことを謝るほかない。幾度も繰り返されたこの問答に嫌気が差してしまったのも、必然であつたのかもしれない。

花音がいつものように思い出を語り、それで思い出すことがあるかと問われ、ないと答えれば花音は悲痛な表情で、俺は無力感に打ち拉がれながら価値のない謝罪の言葉を口にするほかなく、俺が花音の期待に応えられることはない。このループが嫌で嫌で堪らなかった。

花音は必死に俺の記憶を取り戻そうと色んな話をしてきている。花音が必死で俺の記憶を取り戻そうとしてくれるのは痛いほど分かるし、それに報いたいとも思っている。

……けれど、けれども、その花音が見ているのは、俺じゃない俺だ。島崎楓であって、島崎楓じゃないのだ。

いや、花音は俺を見て話してくれている。そんなのは屁理屈だっつのは分かっている。けれど、花音のその悲哀の瞳の深淵に映し出され

ているのは、今の俺じゃない。記憶を失う前の島崎楓なんだ。

きつとこのやりとりに嫌気が差してしまったのは、それに気づいてしまったからなんだ。気づかなければ、いや、もつと言え、記憶を失わなければ、こんなことにはならなかったのに。

俺は、花音の望む、島崎楓、にはなれないよ。

ずつとぼやけていたのだろう。もう病室には花音の姿はなかった。思えば数度言葉は返した覚えがある。けれど、どんな言葉をかけたかは記憶になかった。

外を見れば陽はとうに暮れてしまっている。もうすぐで退院できるといふのに、俺の心は全くもって晴れそうになかった。また退屈な夜の時間が始まる。そんな虚無の精神がこの空間を覆っていた。

こんこんこん、という甲高いノックの音がした。

あまりに突然聞こえたその音にびっくりして小さく声を上げてしまう。続け様にあの冷たく透き通るような声で、部屋に入ることを告げられた。

「こんばんは」

「……おう。こんな夜に来てくれるんだな」

改めて病室の壁にかかった単調な時計を見れば、その短針は9の手前を指している。健全な高校生であればとうに自宅に帰っているよな、そんな時間だった。

「ええ、それともお邪魔だったかしら？」

「……いや、別に」

いつものように佇む千聖は何を言うでもなく、ただ静かに座っているだけであった。つまりそれは沈黙が続いていることを意味するのだが、その沈黙は何故か居心地が悪いと言うほどのものではなかったのが、やけに不思議だった。

「もうすぐ退院できそうね」

「ん、おかげさまで。お見舞い何度も来てくれて、ありがとな」

「……ええ。礼を言われるほどのことでもないわ」

テレビや雑誌に引つ張りだこであるはずの千聖はこここのところ健気に見舞いに来てくれた。その時間がかなりバラバラで、それでいて

そう見舞いの時間が長くないのはきつとその多忙なスケージュールの中を縫うように来てくれるからであろう。以前千聖になぜそうも見舞いに来てくれるのかを問おうとしたが、どうやら千聖に答えてくれる様子はないようだった。

今日も多くを語ろうとするわけではないらしくて、やけに沈黙の間が多い。いつにも増して、千聖は何も話そうとはしなかった。

「……何も訊いてこないんだな」

「あら、質問攻めにでも遭いたいのか？」

「いや、……遠慮しとく」

「……そう」

やはり会話が続くことはなくて、それどころか千聖は俺に目を合わせようともしなかった。

「そろそろ帰るわね」

「え、ああ」

千聖は軽やかに腰を上げてスタスタと部屋から出て行くこうとする。ベッドサイドに腰掛けた俺からどんと遠ざかっていく。

「……千聖、待って」

何も言いたい言葉なんて分かってないのに、気持ちもまとまってるらないのに、思わず千聖を呼び止めてしまった。もう松葉杖などなくても歩ける足は、そんな俺の衝動を叶えてしまった。

俺って、最低な、クソ野郎だ。

第14話 楓の後悔

「……千聖、待って」

「え……う？」

考えが何もまとまっていなまま、呼び止められた千聖はゆっくりとこちらを振り返る。いやまあ、俺が呼び止めたのだから立ち止まるのは当たり前っちゃ当たり前だけど。

俺が特に何かをすぐに口走るわけでもないのに、千聖は首を傾げながらも一旦こちらに戻ってきた。千聖の靴と病室の床が鳴らすコツコツという音がやたらと耳に残るような気がした。頭の中は余計に混乱した。

「えっと、何か用かしら？」

この想いを打ち明けるのはきつと不誠実極まりないことなのだろうということとは重々承知している。しかし、この狭い病室という中で押し込められ続けた気持ちは時間が経つほどに大きくなって、そんな想いと現実、枷となっていたかつての俺の遺産の乖離は余りにも大きくなってしまっていた。自分ではまるで居所の感じられない過去を理由に抑え込むのは、どうやらもう限界のようだった。

きつと俺はこれを口走ったことを後悔することになるだろう。けれど限界だったと諦めをつけて、それを自分を許す口実に行っているんだ、きつと。

「……今度のお見舞いの時にでも何か欲しいものでもあるの？」

「いや、ごめん。そんなじゃないんだ」

呼び止めたつきり、ずっと反応を見せない千聖がこちらを訝しげに覗き込むが、千聖の見当のついていないような反応のあたり、今から俺が千聖に告げるのは突拍子もないことなのだろう。だからこそそのクズ野郎なんだから。そう自分に言い聞かせると、俺は千聖の方を向き直った。

「千聖に、言いたいことがある」

「……改まって何かしら？」

心臓の動悸が一層激しくなる。自分自身では抑えられなかった、吐露の欲に恐れをなしていたのだ。

空気が水を打ったように静まり返る。千聖の董色の瞳が、俺の姿をくつきりと映していた。その透き通るような目線はまるで俺の心を遍く照らして遠くから眺めているようだった。妖のような、意識するだけでこちらが狂ってしまいそうな、そんな視線に釘付けにされながら、俺の口は言葉を紡ぐ。ひどく震えさせながら。

「俺、千聖のことが、好きだ」

「……え」

言ってしまった、という事実への後悔より、伝えたいという欲望が勝ってしまった。千聖は目に見えて戸惑っている。当たり前だった。

「それって……どういう」

「もちろん人としても好きだけど、それ以上に……」

「え？　ちよ、ちよつと待つ」

千聖は声で静止してくれるけれど、そんな静止など何の役にもたたなかった。

「千聖は、どんなに忙しい時でも、俺のことを静かに見守ってくれて、優しきで包んでくれる」

「待ってってば」

「そんな千聖のことが好きだ」

「待ってって言うてるでしょう?!」

刹那、千聖の声が耳を劈いた。その声にハツとさせられて、顔を上げれば、目の前にあった千聖の透き通る瞳には、薄らと涙が溜まっていた。

考えは一切まとまっていなかったはずなのに、自分でも驚くほどに流れるように出てきた告白の言葉。きつと道徳だとか、モラルだとかそういう言葉のフィルターで見たら、すぐ弾き出されるに決まっているはずなんてことは分かっていた。分かっていたはずであるし、千聖はきつとこんなものを求めているということも理解していた。けれども、それを抑え切ることはできなかった。

「あなた、自分の言っていることの意味がわかっているの?!」

今まで、といつてもそんな長い期間ではないし、俺と千聖の関係はこの真つ白な病室だけの関係なのだけれど、かつて聞いたこともなかったような千聖の大声。普段の千聖、それはテレビの向こう以外にはこうしてお見舞いに来てもらえるとときぐらいしか見れないのだが、そんな普段見る淑やかな姿やよく聞く落ち着いた口調からは想像もできないほどの様態に、俺は酷く狼狽した。

「……まあ」

そんな俺には返事を濁すことが精一杯で、深く考えもせずになんか言葉を口走ったことを激しく後悔した。後悔すると分かっていたはずなのに言ってしまった、ほんな軽率さにすら後悔していたのである。

「私は……私は、白鷺千聖なの。Pastel? Palettesの……白鷺千聖なのよつ。私に……そんな気持ちを向けられても困るだけよ」

千聖の声も、酷く震えていて、その元凶は火を見るよりも明らかであった。必死に涙を流すのを堪える顔を見れば、一目瞭然であった。けれど、千聖には俺にも分からないようなとても大きな葛藤を抱えているように見えた。千聖はまるで自分に言い聞かせるように言葉を紡いでいた。だからこそ、余計に俺は、何と千聖に返して良いのか、分からなくなった。

「それは、分かるけど」

「分かっているなら、どうしてっ……どうしてそんなこというのよっ!!」
心まで貫くような鋭い千聖の視線は、そんな声とともに俺を貫いていった。それを酷く悔いても最早そんな吐露を取り消して帳消しにすることなんて出来なくて、千聖の言葉には反論することすらできなかった。

千聖は暫く俯いていたが、やがて顔を上げると、こちらをまじまじと睨み、呼吸を整えて、叫んだ。

「……あなたには、あなたにはっ、花音がいるんでしょっ?!」

「あつ……」

その言葉を聞いた瞬間、脳内に激痛が走った。脳の神経の回路とい

う回路全てに雷が落ちたかのように電流が流れた。決して自分が触れてはならなかった部分、タブーに触れてしまったのだと、直感的に理解した。直感的には理解しつつも、それが恐ろしくて、目を背けた。いつのまにか過去の俺がそこにいたような気がしたのだ。それが恐ろしくて、恐ろしくて、とても向き合うことなんて、できなかった。

千聖はひどく泣き崩れ、そこにアイドルとしての面影はない。しかし、それを招いたのは紛うことなく俺なのであった。千聖からかつて聞いたことのないような悲痛な顔に、俺は何も言うことができなくなってしまうた。

「ふざけないでよおっ……、私は……私はっ、なんのためにっ」
「…………ごめん」
「謝るぐらいなら最初から言わないでよツツ!! バカツツ!!」

千聖の瞳から溢れそうだった涙は千聖が踵を返して振り向く髪と共に宙に消えて行った。とんでもないことをしてしまったという後悔の念は、どうしても消えることはなかった。そもそもそういった自責の気持ちすら見ないふりをしようとするのは、千聖に対しても、そして花音に対しても不誠実なのかもしれない。

馬鹿か。そんな罵倒の言葉ですら今の俺には生温いだろう。

そんな不誠実でクソ野郎な俺は、ただ自分の行いを悔いて、そんな中途半端な気持ちでしてしまった告白で、千聖を辛い目に遭わせてしまったことを只管に詫びることしかできないのだった。そんなことしても意味もなく、千聖に届くわけもないというのに。

もうすでに外はすっかり暗くなっており、病院の窓から見えるのは、高遠に広がる宵闇の世界。闇に落ちた町並みは微かに文明の明かりが点されているだけで、ここから近くに見えるのは、せいぜいこの白い無機質な箱庭から出るための道にか細く灯る、頼りない数本の街灯の灯りだけだった。そんな僅かな灯りに照らされた道に僅かながら影が見えた。走るようなスピードでこの箱庭から逃げ去っていくその人は、どんどん遠くに消えていく。咄嗟に追わなければ、そう思った。けれども、俺にその人影を追い求めることは、少なくとも、今の俺には、できなかつた。どうすれば良いのか、細く、細く伸びてい

た一筋の糸すら見えなくなった俺の意識は、全てを忘れて、その夢幻の闇に溶けるように消えて行った。

「千聖……、本当に、本当に、ごめん」

伝わるわけもない、無力な謝罪を呟きながら。

第15話 千聖の葛藤と後悔

「本番入りまーす！ 3, 2, 1!」

バラエティ番組の収録が始まる景気の良い声。わずか数ヶ月前、芸能界から干されそうになっていた私がかんな番組に出させてもらっているだなんて、この上ない幸運なのだろう。ならばその運と恩に報いて、事務所のために、局のために、そして、ファンのために全力で活動するのが、望ましいアイドルというべきものだろう。

しかし、実際の私の心境は、そんなどころではなかった。

「あはははは!!」

番組でスタジオ中が爆笑の渦に飲まれている時も。

「わっ、わたちは!」

彩ちゃんが緊張で噛んでいる時も。

「また来週〜!!」

番組の締めとなる時も。

まるで何も頭に入ってこない。自分が受け答えしたのかすら覚えていない。完全に意識はそんな収録のことになんか向いてなくて。私の頭はただ同じ思考をぐるぐると回り続けていた。

収録が終わってもう時間は晩御飯を食べていてもおかしくない時間になっていた。テレビ局の楽屋は誰もおらず、不気味なぐらい静かで、より一層私の思考回路を狂わせていた。

『俺、千聖のことが、好きだ』

つい2日ほど前に聞いた楓の声が脳に無限に反芻した。悍ましい毒が身体中を蝕んでいるような、そんな感覚すら覚えた。数ヶ月前に忘れようとして、無理やり押し込められたはずの感情がまた沸々と湧き上がってくるのが分かった。分かったからこそ、二度と同じ轍を踏むまいと、同じ台詞で楓に反駁したのだ。

「はあ……はあっ……」

思い返せば思い返すほど、身体中の震えが止まらない。最早何に対する恐れなのかすら分からない。花音に対してなのか、楓に対してな

のか、それとも、己自身に対してなのか。

そもそも、私が楓の見舞いに精を出していたのは、間違いなく己の過去の過ちへの償いであった。許されることのない罪への贖罪として、そのやり場に迷い、見出した贖いが、まさにそれだったのだ。詰まるところ楓の記憶を奪ってしまったという罪悪感が私を突き動かしていたのだ。それで苦しむことならば、甘んじて受け入れることこそ、自分が受ける至極当然の報いであると思っていたのだ。

だから、だからこそ、自分が恐ろしい。そのようなしようもない、楓から中途半端な好意を見せられただけで、憎むべき恋心をまた燃やしかけている自分が悍ましいのだ。真に中途半端なのは、私なんだ。

「なんで……」

あんなことを言ってきたのだ。最早やり場を失った恋心の抑えどころは、楓の言動、ひいては楓自身への恨言でしか最早抑えられそうになかったのだ。叶はずのなかった恋心が燃やされかけたとなれば、それを消すためには、楓のことを嫌うしかなかったのだ。

なんて、残酷なんだ。いつか感じた、そんな感情が喚び起こされて、私の目からはいとも容易く涙が溢れ落ちた。

「もう……どうすればいいのかっ、分からないのにつ……」

ただただ、抑え込むしかなかったドロドロとした感情は茹で上げられて溢れ出しそうになっている。私は必死に蓋をするように、楽屋のドアを思い切り閉めた。

惨めな葛藤のうちに、あの日のような夜がやってきた。本当に、あれから夜の時間なんて碌なことがなかった。ずっとずっと、苦しい思いをしてばかりだった。そんな私は夜が嫌いになった。

「えっ」

急にポケットに入れていたはずのスマートフォンが振動する。嫌な予感がした。したけれど、見ずにはいられなかった。恐る恐るポケットから振動し続けるスマートフォンを取り出した。

画面にあった名前は、『松原花音』。私は一度安堵した、しかし、その安堵は仮初のものでしかなかったことに気がついた。それでもま

だ振動を続けるスマートフォンに、私には通話に応じるという選択肢
しかなくて、画面をスライドした。

「……もしもし?」

『あつ千聖ちゃん、ごめんね? こんな夜に』

ああ、よかつた。花音は普通だ、そんな風に思えた。いや、思い込
むことができた。けど、まるで自分は普通じゃなかった。息が荒い気
がした。

「それで、えっと、どうかしたの?」

『うん……その、相談があつて』

「……相談?」

花音からの相談。まるで数ヶ月前の自分達を見ているようだった。
私がかつて狂い始めたあの時。今でも忘れることはなかった。私の
鼓動はかつてないほどに速まっていたに違いない。

『楓くんが、記憶戻すの、どうしたらいいかなあ……』

花音からきた相談は、かつて受けたことのあるような相談だった。
そもそも楓が記憶を無くした原因はつきり言つて私にあるに違
なかつた。だから、私がこの問いから逃げることは許されないこと
だった。けれど、どうしたつて戻らないものは戻らなくて、私にはど
うすればいいかなんて見当もつかないことであつた。

「……さあ」

『……やっぱり、思い浮かばないよね』

「ごめんなさい……」

『ううん、千聖ちゃんは、悪くないから……』

花音からそんな言葉がかけられるたびに、私の中の罪悪感は大きく
なつていった。なぜ私は親友をこんな目に遭わせているのかと。そ
んな後悔をしていると、ひどく悲しい通話は、静寂を迎えていた。

『早くしなきゃ……、早くしないと……』

「えっと……花音? ……大丈夫?」

『とられちゃう……から』

「……えっ?」

静寂はこちらだけのようで、耳を澄ませば、花音が小さく呟いてい

る声が聞こえてきた。それは明瞭ではなく、はっきりとは聞き取れなかったけれど、どこことなく、怖さをも孕んでいた。そして、私の思考は、そこではつきりと止まってしまった。

『ううん、……ひぐつ、ごめんね？ 楓くん確か今日退院だったよね？』

今度3人でご飯食べよう？』

「えっ、ええ。そうね、今度休みが取れそうなら伝えるわね」

『……うんっ！ ありがとう千聖ちゃん！』

ピツ、という音とともに通話が切れた。最後の方では花音の声はなんとか明るく保たれていた。通話が切れるとともに、はあとひとつため息をついた。

また辺りは静寂に支配された。夜も遅い閑静な住宅街では、生活音すらあまり聞こえることはなかった。だからだろうか、妙なほどに思考が繰り返されていた。

花音は一体何にそこまで怯えているのか。勿論楓の記憶が戻る方法について何度も助言を求める以上は、記憶を戻すと言うことは至上命題であるには違いなかった。

そして、花音がそれも怯える理由は、理由は。

頭の中を駆け巡る回路が繋がってしまった。もし、花音が楓を私に取られることを怯えているのだしたら。無論、かつての、ずっと前の私であればそんなことは杞憂だと、何の躊躇いもなく花音に言えるはずだった。

しかし、今の私にはそんなことを言えるはずがなかった。だってたった今、楓に沸き立つ恋心に揺れてしまったのだから。

ああ、自分が悍ましい。消えてしまいたい。

『今がチャンスなんだぞ』

私の中の悪魔が惑わせる。

『あの時は酷く拒絶されたのに、だ』

私の中の悪魔が嘲笑う。

『その恋が、叶うんだぞ？』

私の中の悪魔が囁いた。

かつては一縷の希望すらなかった状態だったのに今は楓の記憶が

消えた以上、私にもこの淡い恋心を叶える余地があるのだと、私の中の悪い心がそう囁いていた。それがひどく穢らわしい。けれど楓の記憶を消したのは私であった。そんなもの、冷静に見れば、私がそこでその想いを叶えるのは、あまりに卑劣であった。

いやだ、いやだ、いやだ。なぜ神様は私にこんな分かりやすく罠だらけの蜘蛛の糸を垂らしたのだ。良心に従うならば、楓の教えてくれた心に従うならば、そんなもの掴むどころか触ってはいけない。けれど、そんなもの掴みたくなくなってしまつて当然じゃないか。だつて、だつて。

今の楓が、好きなのは、私なのだから。

この糸を掴めと叫んだのは、楓だつた。

『楓を奪え』

違う!!!

そんな邪悪な考えが思い浮かんだ瞬間、頭を思いつきり揺さぶつた。

違う。

違う。

違う。

私は、誓つたんだ。

己のなした罪に向き合おうと。

死ぬまで、私はこの罪を贖わなければならないのだと。

一つ息をつく。そうだ。そうなんだ。

楓の隣にいるのは、私じゃない。

私じゃないんだ。

目の前はぼやけて何も見えていない。そんなもの人生と一緒になんだ。私だつて、まさかあの喫茶店で花音から相談を受けた時だとか、

もつと遡れば、あんな新学期の始まりの時だなんて、こんなことになるなんて想像のつくはずがなかった。

だから、これで、これで、いいんだ。

そう思った瞬間。頭に衝撃が走った。

「え」

私の掠れた情けない声が漏れた。頭が、熱い。まるで地獄の釜で湯搔かれたように。痛い。痛い。

気がつけば私の体はアスファルトに伏していた。横たわった体をなんとかしようと、辛うじて顔を上げた。

私の眼前に立つ、そいつは、狂気を孕んでいた。何の因果か分からない。もしかするとバチが当たったのかもしれない。

「あぐっ……」

「白鷺千聖……、こんなに上手くいくやつが世の中にはいるのに俺は……」

恐ろしい。私は、間近に死の恐怖というものを感じた。そいつが手に握りしめる鈍器は、まるで死神の鎌のように映った。

どこの誰とも知らないやつに恨まれ、そして死ぬ。親友を裏切り、最愛の人を裏切ったやつには相応の末路なのかもしれない。

死が近づいてくる。

嗚呼、こんなことなら。こんなことなら。

最期に、楓に、『好き』ってちゃんと、言えたら良かったのにな。

私って、本当にバカね。

第16話 千聖の淪落

眼前に迫ってくる狂気。私は死を覚悟して、視界に暗闇を灯した、はずだった。

騒ぎ立てるような人の声、直後に聞こえてきたのは怯み、苦しんだ声。まるで私が先程吐き出したような。

慎重に目を開けた。恐怖と混乱で涙に打ち震えた瞳は、すぐには外界の様子を映さなかった。辛うじて映し出されたのは、先程私を襲ったばかりの暴漢が走り去る姿。ちょうどその時、地に臥していた私の体が抱え上げられた。

「おい千聖!! 大丈夫か、返事しろって!!」

「あ……」

何故だろうか。その声を聞いた私はひどく安心して。何か心が温かいもので満たされていくような感じがして、私を抱き抱える楓を一瞥した。その優しい瞳から零れ落ちてくる涙は真実の味がして、ふと力が抜けた私はそのまま意識を失った。

何かが壊れた音がした。

何かに包まれているような感覚がして、目が覚めた。ベッドサイドに置かれた勉強机の電気だけが部屋をぼんやりと照らしている。カーテンは閉められていたが、僅かな隙間からは何も見えことを考えると、どうやらまだ夜の時間帯らしい。

私はベッドに寝転がっていたらしく、ゆつくりとその身を起こした。少しだけその体は気怠さを感じるものの、起き上がれないほどに重傷、というわけでもないらしい。

「……楓」

その体を起こした瞬間、薄暗い椅子の上に座り、眠りこけている人物が目に入った。それは紛れもなく、私を死の淵から救い出した楓の姿だった。

私の微かな声が聞こえたのか、楓が反応を見せた。とても小さなその声。しかし不思議とか細いわけでもなく、その声だけで安心感が私

を包んだ。

「……よ、起きたのか、千聖」

「ええ……、その……ありがとう」

けれど、その安心感もほんの一瞬のこと、落ち着いてみれば、今の楓は最も会いたい人物であり、会いたくない人物であった。まだ私の心は揺らぎに揺れている。冷静に考えると今の私の心はほんの少しも落ち着いていないのかもしれない。

「いいんだよ。無事で良かった」

「……うん」

ベッドの横に転がっていたスマートフォン画面がぼつと光る。別に何でもない通知だったのだが、その画面を見るに、今は日付も変わる間際らしい。それを考えれば私はきつと2時間近く眠っていたのだろう。

……これ以上楓に迷惑はかけられない。それに僅かながらでも踏み切りがついた自分の決心を揺らがせたくない。今も私の心は崖っぷちを彷徨っているのに。

「……ごめんなさい。もう帰るわね」

「待てよ、まだフラフラしてるじゃねえか」

だから、逃げようとした。

「あつ……」

けど、楓は、逃がしては、くれなかったんだ。

楓は、立とうとしてもまだ立ち眩みがする私の手を掴んだ。そんな言葉に甘える形で、またベッドにへたりと座り込んだ。

でも、力が抜けたのは、頭部をやられたせいだけではないだろう。怖かった、しかしそれ以上に嬉しくて、まだここから離れたくなかった。ここにいれば全てが救われるような気がして。勘違いかもしれないけれど、この安息の地の傍に居続けたかったのだ。

「……私、襲われてたのね」

だからこそ、どうでもいいことで話を伸ばしてしまう。そんなこと確認せずとも、明らかであった。

「ああ、よく分かんないけどな」

「ここまで連れてきてくれてありがとう」

改めて部屋を見渡せば、ここはかつての私が足繁く通っていた場所。楓の自室だった。日課のように楓を起こし、私が楓に決して悟られぬよう、密かに淡い恋心を隠し続けてきた場所だった。

「……なあ、千聖。言いたいことがある」

「何、かしら」

「……その、この間はごめん」

きつと楓は病室での一件を謝っているのだろう。けれど、謝るべきは私であるはずだった。だから、ゆつくりと首を振った。

「……俺、中途半端な気持ちで、千聖に告白しちゃってた」

「うん……」

「でもさ、冷静になって考えて、それでわかった」

「……うん」

空気が静まり返る。薄暗い部屋は、私に浮遊感すら与えていた。私の冷たく、凍った手に、楓の手が添えられた。温かかった。

「今日、千聖が襲われてるの見かけて、本気で分かったんだ」

「うん……」

楓の手に力がこもった。私はそれに釣られて隣に腰かけた楓の顔を見上げた。楓の目は真剣だった。

その酷く温かく、酷く鋭い視線に、私は、堕ちた。

「俺、千聖のこと、本気で好きだ」

「うんっ」

温かい涙がこぼれ落ちてくる。もう、私の心は限界だった。

楓の温かい抱擁が私を包む。ずっと求めていた抱擁。私は、堕ちてしまった。堕ちるしかなかった。もう伝えずに後悔したくなかったから。

「私も、私も貴方がことが好き、ずっと好きだった……。けど全部抑えつけてっ」

「……うん」

「愛してるの、貴方のこと。もう離したくない……離したくない……！」

「千聖……」

すぐに壊れてしまいそうなほどに脆い楓の声が響いた。脆いのは私の心も同じことで、つい先刻まで保っていたはずの良心は、私の作り出す虚像、仮初のものではしかなかった。

自分がどこまでも堕ちていくのが分かった。これまで、どれだけの葛藤を繰り返しても手に入れることの出来なかった多幸感が私を支配していた。かつては望むことが許されないと思い込んで、望むことを自らに諦めさせていた。けれど、今はただ自分が後悔しないために、それを望むのだ。望まなければ後悔するのは自分だから。その後悔は、あの時、痛いほどに理解していたんだ。

恋は盲目。よく聞く言葉であるが、今の己がまさにそうであった。まさに盲目だ。だってそうだろう。今の私は楓さえいれば、それでも構わない。私にそう言わせるまでに私を狂わせたのは、楓なのだから。酷く甘い蜜の味は過去の自分を犠牲にして漸く辿り着いた末であった。

狂うことが、幸せだった。

恋心を抑えつける自分はどうもない。そんな倫理だとか、体裁だとか、どうでもいい。今は再び燃やされたこの炎に溺れることしか考えることが、出来ないんだ。

「千聖……」

いつかは、私、を慰める抱擁だった。これは、私を縛り付ける抱擁だった。痛みすら感じるほどの強い束縛。しかし、その束縛すら愛おしい。

「楓え……」

だから私も、己の枷の先を結びつける。二度とその枷が外れぬように。二度とこの檻から脱獄しないように。この檻は、私たちの愛の檻だから。

予定調和のように。私たちはこの檻に閉じ込められた。そして互いを受容れて貪りあう。

誓いのキスは、背徳の味がした。

長すぎて息が出来なくなるほどの口づけだった。けれどまさにこれこそ溺れているようで、私の心の中は快感の渦に塗れていた。

「……………ふはっ……………はあっ、はあ……………」

ほんのり上気して、痙攣のような息を吐く楓は扇情的であった。けれど、そこでその興奮に身を落とせるほど私とて余裕はなくて、ただ二人で重なり合うように、ベッドに倒れた。

「……………楓」

「……………ん」

言葉を交わさずとも、きつと私の言わんとすることは伝わっているだろう。楓の僅かな微笑みがそれを物語っていた。

ただただ温かくて、今まで決して得ることの出来なかった温もりを享受するので精一杯だった。

何も二人の間の言葉などないのに、途轍もない落ち着く空間だった。少しだけ浸った余韻を楽しみ終わり、二人とも体を起こしてもなお、この心は満たされ続けていた。一度幸せを味わうと、もっと欲しくなった。

この幸せを永遠に。密かに心の中に誓ったんだ。

街頭が僅かに照らす道を歩く。アスファルトの地面は夏の湿気を吸い込んでやけに熱くて不快なはずだった。けれど、そんなこと、今の私にはどうでも良かったのだ。だって、私の隣には楓がいるから。「そういえば、それどころじゃなくなって忘れていたけれど、退院おめでとう」

「ああ、ありがとう。無事元気になったよ」

「ええ、病室の時の楓は陸に打ち上げられた魚みたいだったものね」

「なんだそれ」

くだらない話でくすりと笑う。こんな日常を感じたのはいつぶり

だろうか。

「それにしても、千聖も災難だったな」

「まあ、まさか襲われるなんて思っていなかったけれど」

その時の私は、それどころじゃなかった、なんて言えば楓は怒るだろうか。

「まあ、今度も俺が守るよ」

「……ふふっ、心強いわね」

「……まあ、といっても限界はあるけどさ」

「あら、守ってくれないの？」

「ずるい言い方だな」

それはもちろんずるいやつだから、なんて無粋なことを言いはしない。少し茶化したつもりだけど。茶化された楓は渋そうな顔でうんうん唸っていた。

「……まあでも、俺がいつでも守れるとかそんなわけではないから、なんとかして欲しいけどな」

「なんとかって何よ」

「その、護身用の武器とか？」

「ふふっ……なにそれ」

楓からそんな言葉が聞けるなんて思わなかったから、思わず笑ってしまう。けど、楓の顔を見るに真剣な物言いだっただらしかった。

「……千聖のこと、二度と失いたくないから」

「……うん」

そんな言い方はずるいだろう。そんなこと言われたら、楓の言うことなんてどんなことでも聞いてしまう自分がいた。きっと私は理性だとか、そんなものが可笑しくなってしまったのだろう。

どんどん自分が狂っていく感覚がした。もう完全に心は楓に堕ちてしまっているのだろう。

「ねえ、楓」

「ん？」

だから、だから最後に、楓を試すことにした。

「花音は、どうするの？」

「……」

罰の悪そうな顔を浮かべる楓。そりやそうだろう。むしろその顔を浮かべるべきは私かもしれないが、そんなことを考えられない私はやはりどうやら狂ってしまっているらしい。

「……質問が悪かったわね。どうして楓は花音じゃなくて、私を選んだの？」

聞きたいのはそこだったのかもしれない。私は怖かったんだ、花音に楓を取られることが。私も花音も、それはきつと一緒にだったんだ。だから最後に問うたのだ。花音じゃなくて、私である理由を。

「……花音が好きなのは、俺じゃない。前の島崎楓なんだよ」「あっ……」

だから、その答えを聞いて私は誓ったんだ。

今の楓に真正面から向き合おうと。そのままに愛そうと。ありのままの、今の楓を愛するのが、私の使命なんだ。

だから、愛してる。楓。

第17話 千聖の墮落と花音の決意

もう日付はとつくに変わっており、物静かな住宅街は歩く人すらない。月明かりとゆらめく街灯でしか照らされることのない道はどこか幻想的だった。

「……と、送ってくれて、ありがとう」

「……いいんだよ、あんなことがあったわけだし、心配にもなる」

私の中の果実が実ったその晩。楓は危ないからとわざわざ私の家まで送ってくれた。といってもまあ数時間前にはああやって名も知らぬ誰かに襲われかけたわけだから、楓が心配をしてくれるのも無理のない話だ。

「まあ、今日は色々あったけど、お疲れさま」

「ふふ、楓こそ」

口数は不思議と少ない。でも、道中ではいっぱい話したし、それで私に不満を垂れることなどない。

「……ねえ、少し屈んでくれないかしら？」

「ん？」

そう言っただけでも背の高い楓を少し屈ませる。少し屈んだぐらいでもまだ私より背が高い。でも、そういうところも安心感があつて良いのかもしれない。

「……なあ、腰痛いんだけど」

「ふふつ、そのまま目を瞑りなさい？」

「ん」

何が起るか知るか知らずか、呑気に目を瞑って待つ楓。そんなところも愛おしくて仕方がなかった。

「んっ……」

背伸びをしながら、プルプルと震えながらも、その端正な口を塞ぐ。瑞々しさも感じられるその唇をほんのちよつとだけ味わって、その唇を離した。

「……ん、そゆことか」

「……ええ、びっくりしてるわね」

「何のことだか」

「貴方は嘘ついてる時いつも右手をポケットに入れてるのよ」

「……そうかよ」

ズバズバと心の中身を言い当てられるのが面白くないのかそっぽを向く楓の体に倒れ込む。意外とがっちりしていて、触れているだけでやっぱり、心が温かくなった。余韻も冷め切らぬうちにそんな抱擁を解いて、踵を返した。

「ふふっ、おやすみなさい」

「ん、おやすみ」

私が扉を閉める最後の最後までこちらに手を振ってくれる楓。そんな仔犬のような可愛さと唇に触れていた繊細さを確かめながら、暗い玄関に上がったのだった。

翌日、今日は幸い仕事の予定も夜までなく、日中は何も予定のない日だった。所謂半日オフというやつだ。私がすること、そんなの決まっている。きつと私の立場にあるどんな人でもそう答えるだろう。まあ、この位置は誰楓の恋人であろうと譲るつもりはさらさらないが。

「……楓のところに遊び行こうかしら」

アポ無しだけれど、楓だつて予定がないことは昨晚とうに確認済みだった。意気揚々と私は家を飛び出す。どうせこんな朝早くなんて、楓が起きてるわけはなくて。私が住宅街を少し歩いて楓の部屋に辿り着くと、案の定楓はぐっすりと眠っていた。

「……起きなさい、というのはちよつと悪いわね」

昨晚私を絶望から救い出したばかりの英雄。そんなヒーローはその勇敢さが見出せないほどにあどけない表情で目を瞑っている。私はそんなヒーローに、かつての日常のような秘事の口付けだけでは飽き足らず、自分がようやく得た安息の地を堪能すべく、まだ目覚めぬ楓の隣に潜り込んだ。

「ふふふ……楓、貴方は私だけのモノ……」

強く強く抱きしめる。もう二度と離さない。

楓は渡さない。誰にも、絶対に。

……とても温かく、馥郁としたこの空間。昇天しそうな幸福感に溢れたその場所にいると、私はすぐに意識が落ちてしまったのだった。

「んん……」

何かが隣で動くような感じがしてぼんやりと目が開く。眠っているのはあまり見慣れない天井の……、そういえば俺はこの間漸くあの白い牢獄から抜け出せたのだった。そんな頭の整理をしてふと隣に視線を移した。

「すう……、すう……」

とても安らかな寝息を立てて俺の右腕にしがみついている千聖の姿。一体いつの間に家にいたんだ。というかなぜ俺の家にいるのか。そんな謎を問い詰めようかとも思ったが、正直眠気とか、そういうのが勝って、起こさなくてもいいやという結論に至る。というかこんな
に幸せそうに寝てる千聖をどうして起こすことができようか。

今までまるで見たことのないよう笑みを浮かべながら眠る千聖。そんな顔を見れば見るほど、昨晚の千聖の真剣な顔が思い起こされた。

『花音は、どうするの？』……か』

昨晚の千聖の、まるで俺の心の中の覚悟を確かめるような、そんな問いかけ。そんな問いかけがなされた瞬間俺の脳はまた、あの痛みを起こした。考えれば考えるほど苦しくなって、そして、結局逃げ続けてきた。

「……どうすればいいんだよ」

逆ギレをするような答えしか出てこない自分が情けない。詰まる
ところ、あんなに必死になって俺を追い求める花音にこの事実を切り出す勇気がないのだ。チャンスはきつとあった。昨晚の寝る直前、花音からメッセージアプリで明後日の予定を聞かれ、悩んだ末に正直に暇だとは返したものの、そこで言うことも出来たはずだった。もちろん

ん、対面で言わないというのは不誠実なのかもしれないけど。だからといって、明後日会うののだとしてもこれを告げる勇気があるかと言われたら、自信を持って首肯することはできなかった。

俺は、まさに、醜く臆病な人間だった。そして、俺は一緒にいるのが楽だった千聖を選んだ。選んだことは後悔していない。俺が千聖のことを好きだと思いう気持ちはきつと本物だと思う。けれど、俺が今こうして得ている時間は、全て俺の臆病さが産んだものだった。後ろめたさを感じるようだった。

「はあ、……ん？」

俺が思考をクリアにするために息をついて、起き上がろうとすると、俄に千聖の掴む力が大きくなる。これじゃ起きれないなと思っていると、ぶつぶつと寝言が聞こえた。

「……えへへ、楓……すき……」

俺があれこれ悩んでいる間も、千聖は柔和な笑みを浮かべている。俺はきつとこれを守るために、その言葉を口にしたのだろう。そんな風に考えると、何故だか分からないが腑に落ちた、そんな気がした。

意味もなく無機質な天井を憂いながら眺めることなんてやめてしまつて、隣で眠る千聖の微笑みを眺めた。もう起きなくても良いや、そんな風に考えてまた体をベッドに戻す。どうせ明日と同じで今日も用事はない。ならちよつとぐらいこんな穏やかな時間を享受してもいいだろう。そんな考えと睡魔に呑み込まれるように、俺の意識はまた落ちていった。

「……ふふ、貴方は誰にも渡さない……から」

何かが聞こえたけど、それが何なのか分からないまま、俺の意識は闇に落ちた。

ハロハピの活動がなんとか落ち着いた。私の心は気が気じゃなかったけど、なんとかやり切った。きつと悟られることもなかった、そう思っていた。

「あの、花音さん」

「どうしたの？ 美咲ちゃん」

そんな私に後ろから声をかけてきたのは美咲ちゃんだった。もう自宅への帰り道についていて、もうじき別れ道というところだった。

「その……言いにくいんですけど、悩んでることとかないですか？」

「……えっ、悩んでること？」

「花音さんが、時々すっごく辛そうな顔してる時があつて……だから何かあつたのかなつて」

美咲ちゃんにはどうやら私の心の内が全てとはいかないまでも悟られてしまったらしい。けれど、こんなに濁った醜い心を伝えられるほど、私は大人ではなかった。

「……ううん、大丈夫だよ。心配してくれてありがとう」

だから、嘘をつくことにした。こうすればきつと、バレることなんてないから。

美咲ちゃんとはそのまま別れて一人帰り道を歩く。きつきのやり取りの中で速くなった鼓動の音は収まりそうにはなかった。楓くんが退院してから1日経った。退院には立ち会えなかったし、千聖ちゃんに聞いても何も良い案は出てこなかった。きつと楓くんの記憶が戻ることもなくて、そんな望みは決して大きいものではないのだろう。言葉にすれば悲しくなつて泣いてしまうから、もう考えるのはやめてしまいたかった。けれど、そうすれば、全てが終わってしまうような、そんな気がしたから。楓くんと繋がり、全て消えちゃうような気がしたから。

考えに考え抜いた私は、今までしてこなかったことをしてみることにした。今まではただかつての思い出を語り、そうして楓くんの記憶がどこかで引つかかってくれないかと、そんな風に信じて病室で楓くんと対話を続けてきただけだった。

けれど楓くんももう退院したし、怪我ももう治っている。なら、折角だから、と考えついた。明日は楓くんも予定がないらしい。ならば、きつと良いだろう。暴れ回る心を抑えながらメッセージアプリのチャット欄を開いた。これがもう最後のチャンスだと、自分に言い聞

かせながら。

『楓くんといきたいところがあるの！ 一緒にいこう！』

第18話 楓の甦生と千聖の乱心

朝目覚めると、少しだけ複雑な思いで枕元のスマートフォンを開いた。

『楓くんといきたいところがあるの！ 一緒にいこう！』

自ら招いた事態とはいえ、どんな顔をして花音に会えばいいのかわからないまま、そして、やはり千聖とのことを切り出すことが出来ぬまま家を出た。

外は夏の様相で、ジリジリと太陽が地上を焼き付けている。その暑さは不快感すら催すほどだった。地図アプリを見ながら辿り着いた、指定の場所で花音を待っている間も、周囲に日陰はなくて、そんな炎天下で立ち続けたのだが、こんなふう待つという時間が続くと、考えたくもないことを考えざるを得なくて、やけに時間が長く感じられた。

「楓くん、お待ちせー！」

遠くからそんな声がして、そちらの方を振り返る。そちらを見れば水色の涼しげな服を身に纏った花音がいた。いろいろと思うところはあるけれど、ここまで来たからにはもう逃げることもなんてできない。そう自分に言い聞かせて腹を括った。

「よっ、久しぶり」

なんとか違和感のないように、と振る舞おうとするのだが、よそよそしい態度になっていないだろうか。そんなことを考えてもそれを指摘してくれる人なんているわけがないのもう考えないことにした。

「それで、行きたいところってのは？」

「……うん！ 色々あるから順番に回っていききたいなーって！」

「そっか。じゃあ行くか」

「うんっ」

自分が知らないはずなのに、どこかで見たことのあるような光景に違和感を覚えた。けれど、花音という以上、そんな違和感を感じても戸惑っている余裕もなくて。

「…………え」

「あつ、…………えつと、手、繋いじゃ…………だめかな？」

突如握られた掌にびくりと反応してしまう。こちらを見上げる花音の瞳は揺れていて、顔に暗い翳を落とし込んでいた。そんな状態の花音を見てしまつては断ることも出来ず。

「あつ」

「行こうか」

「うん」

自分の心を握りつぶしながら、その手を握り返した。

それから沢山のところを周った。最近まで入院していたために、全くその様相を知らなかった花咲川の街の中。住宅街ばかりだと思えば大きな河川沿いには木々が立ち並んでいて、整備された遊歩道のようになっていている。遊具や藤棚の日陰のある公園や、住宅街のなんてことのない丁字路。そろそろ小腹が空いてきた頃かと思う時間になれば、学生らしくファストフード店に立ち寄り、軽くポテトを摘んだりもした。偶然にもそこは花音のバイト先らしく、花音も漸く落ち着いたように頬を緩ませていた。

どこもかしこも、来たことがないはずなのに、来た覚えがある場所であつた。その違和感はその旅の途中ずっと抱いていたもので、そんなことに心が囚われていると、時間はあつという間に過ぎていった。花音と待ち合わせをしていた時は、時間の流れがとつともなく遅く感じたのに、気がつけばもう日は暮れ始めていた。

「…………ふう、今日は疲れたね」

「ああ。体力落ちてるのかな…………はは」

乾いた笑いが出た。入院していたために体力が落ちていたのだと思うが、最後だと言われて連れてきてもらったこの場所。俺の眼前には、都会には似つかわしくない小高い山が聳え立っている。いや、標高で言えば絶対に高いわけじゃないのだが、一日中歩き回った俺からするととても高い山に見えたというだけだ。

「…………今から登るのか？」

「あはは…………、体力保つかなあ？」

「……頑張ります」

夏の暑さはまだこの日暮れの時間でも続いていて、花音とわずかながらに繋がれている右手も汗ばんでいた。そんなことも気に留める間もなく、何やら石段でできた階段を登り始めた。

「ふう……」

「手すりあるから持っていいいんだよ？」

「……ああ、そうする」

人が5、6人並んでも裕に歩くことのできる階段。その先はまだまだ遠く、ふと気を抜けば左右から迫ってくるような背の高い木々に呑み込まれそうな感覚すらおぼる。上の方から吹き下ろしてくる風は頬を撫でながら、何かを囁いているような気さえした。

「頑張つて、もうちよつとで上まで着くから」

「……ああ」

石段の隣に並べられた石柱には、何やら人の名前のようなものが連なって彫られている。なんとも独特な雰囲気を持つここは、上に近づくたびに背中を何かに摘まれているような気がした。まるで、そこへ行くことを止めるように。

てつきりこの夏の暑さでかいているのだとおもっていた汗は、本当は冷や汗だったことに気づいた。妙な悪寒が止まらないが、花音はズンズンと石段を登り続けている。その顔には決意が示されており、口がきつと結ばれていた。容易には話しかけられないような雰囲気を感じ出しながら、花音は足を休めることなく石段を登っていた。俺はその雰囲気当てられ、軽口を叩くことなんてできるはずもなく、わずかに唇を震わせながら、花音についていくことしかできなかった。

石段の曲がり角にたどり着く。花音は俺の数段先を行っていて、その曲がり角を俺より先に曲がって登る。俺もそれに続くように曲がった。

曲がった先にあつたのは、石でできた鳥居だった。そんな大きなものではない。収まらない動悸に困惑しながら頂上に辿り着いた。奥には社だつて見えていた。

「……(ん)は」

途端に頭に鋭い痛みが走る。最近幾度となく感じたこの鋭い痛み。自分の中の何かがあるがもがいている、そんな痛みだった。

「ここはね」

花音は登ってきた石段の方に振り返る。釣られて俺も振り返った。空気が凍る。

「楓くんが、記憶を喪った場所、だよ」

そんな花音の声が耳の奥に響いた。

刹那。

まるで今まで見たことのない景色が脳を駆け巡る。あまりに膨大すぎるその量に息が苦しくなる。

『私ね。幼馴染、やめたいな』

花音から言われて驚いた時。

『ひたむきな千聖がかっこよくてなんか好きだな』

夜に千聖を励ました時。

『……これが、私の気持ちだよ』

花音から告白された時。

『俺に、任せて』

千聖が道を踏み外すのを止めようとした時。

『俺には、花音がいるから』

俺が千聖を拒絶した時。

『俺、花音のこと、好きだ』

『楓くんっ、私も大好きっ!!』

俺が、花音を、愛していた時。

「う、あつ……あつ……」

「楓くん……?」

「ああああああつ?!」

流れ込んできた映像。それらはどれもが全て俺が俺であった時の姿だった。そこで、俺は……俺は。

俺が選んだのは、花音だったのに。

「楓くん?!」

震えが止まらない。心臓が叫んでいる。呼吸すら苦しくなって、俺の体は地に倒れんとしていた。

「大丈夫?! ねえ、楓くん、落ち着いてっ!!」

「はあっ、はあっ、はあっ」

俺を優しく抱きとめた花音の温もりが途端に心に広がった。呼吸は荒いが、周りの音が聞こえるようになった。

ただ、落ち着けば落ち着くほど、頭は余計に混乱した。

なぜ俺は、忘れていたんだ。

なぜ俺は、見捨てたんだ。

なぜ俺は、間違えたんだ。

もう何も分からなくなつて、気がついた時には、俺は鳥居の下に座っていた。

「あつ楓くん! 大丈夫?」

こちらを隣から覗き込む花音。苦しくなって、苦しくなって、俺は花音に抱きしめられていた。

「大丈夫だよ……大丈夫、大丈夫」

意識するまでもなく、俺は花音を抱きしめ返して、ただ無力な涙を流すのみだった。

「……全部、思い出したんだね」

「ああっ……うう……花音」

「どうしたの?」

俺は顔も上げられず、花音に顔を埋めたまま、力なく言葉を吐き出した。

「本当に……本当に、ごめん」

「うん、うん、辛かったね……、しんどかったよね……」

ただただ体から力が抜けて、何も考えられないほどに頭はぐちゃぐ

ちやして。俺は花音に謝り続けることしかできなかつた。

泣き疲れて、ただただ、只管に謝り続けた。

しかし時間は過ぎ去って夜になってしまった俺は、花音に諭されながら石段を降りて、下に着いた。

「本当に……花音、ごめん」

「……ううん。忘れてたんだから、仕方がないよ。気にしないでね」

「……ありがとう」

「うん、楓くんも今日のところは気持ちを落ち着けて？」

「……そうする。本当に……ありがとう」

そのまま俺は、向こうの道へと帰っていく花音を、力なく眺めていたのだった。

今日の分の仕事も漸く終わり、家にたどり着く。本当ならばこのまま楓の家に行きたいぐらいだったけれど、2日連続で押しかけ続けるのも申し訳なくて、自室でゆっくりとしていた。

突然スマートフォン画面が光った。着信だった。楓からだと思つて飛びついた私は、楓ではなく花音がその相手であることを知つて、少し気持ちを落ち着かせた。そして、その電話に応答した。

「もしもし、花音？」

『あっ千聖ちゃん!!』

「ど、どうしたの？」

未だ嘗てないほどに花音の大声を聞いた。おそらくこの先これより大きな花音の声など聞くことはないだろう。

『楓くんがっ、楓くんがっ』

楓が？

『記憶を取り戻したのっ!!』

えっ。

楓が、記憶を取り戻した？ 一瞬花音の言っていることの意味がわからなかつて惚けてしまった。けれど、花音と通話している以上、何

も返さないわけにもいかず。

「そ、そう！ おめでとう！」

『うん、ありがとう！』

心の片隅に僅かに残った心でそう返すと、電話は切れてしまった。いや、むしろ切れてくれてありがたかった。冷静に今の状況を考え直した。

楓が記憶を取り戻した？ ということは、あの神社での出来事以前のことを思い出した、そういうこと。

「あつ……あつ……」

途端に怖くなった。もしも、楓が記憶を取り戻したのだとしたら、私は……ワタシは……。

私はあくまでも楓が記憶を失くしてしまった後、その窪みを埋めるための後釜でしかなかったとしたら……。嫌な予感がして、身体中がガタガタと震え出す。

怖い。

恐ろしい。

「はあつ、はあつ……」

楓は、私を、捨てるのだろうか。

いや、そんなことはないはずだ。楓は私のことを愛してくれているんだ。私も楓を愛している。ずっと、ずっと、ずっと。

誰よりも楓のことを愛しているのは私だ。私なんだ。楓を愛しているのは私。楓が愛しているのは……私だ。

誰にも渡さない。

「はあつ……はあつ……」

銀とドス黒い赤が混じり合って、静かに床を濡らして、己の心を慰めるのだった。

第19話 楓の決断

部屋は何も見えないぐらいに真っ暗だ。天井にある電気は点いておらず、分厚いカーテンによって日光は完全に遮られて、まだ時間は昼間だというのに夜のように真っ暗だ。

そんな真っ暗闇の静寂の中、俺はただ後悔の海に溺れていた。

俺は一体どこで道を踏み間違えたのか。

花音の告白を受けたことか？

千聖を応援したことか？

千聖をあの日あの場所に呼び出したことか？

それとも、千聖の告白を受けてしまったことか？

何一つわからない。この部屋に光が一筋も見えぬように、哀れでクソな俺のことを導いてくれる光なんて一筋もなかった。至極当然のことだった。

俺には、花音か、千聖かなんて、選べない。選ぶ資格すらない。けれど選ばなくちゃいけない。両方だなんて、そんな馬のいい話はないし、きつと花音も千聖も認めないだろう。俺だってそんなのは嫌だ。……けど、どっちかを選んで、どっちかを捨てるのはもつと嫌だ。

「どうすりゃいいんだよ……」

そんな泣き言を言ったところで、間違いなく自業自得であるし、答えてくれる人間もいなかった。それに、きつと答えなんてものはなかった。

そもそも、俺に選択肢なんてあるのだろうか？ 花音を選んで千聖を捨てるのも、千聖を選んで花音を捨てるのも、どっちも間違いなんじゃないのか？

あの神社で千聖とともに落ちた夜、あの、かつての俺が選んだのは花音だった。

そして記憶を無くしていた頃の夜、あの、かつての俺が選んだのは千聖だった。

ならば、今の俺という人格は誰を選ぶべきなのか。最初の記憶のままに花音を選ぶのか？ それとも時間の移り変わりとともに変わっ

た千聖を選ぶのか？

花音のことも、千聖のことも、好きだ。でもその好きはどちらも紛れもない好きで、どちらがより大きなものかすら分からない。どちらかを選んで、もう片方を嫌いになるなんてこともできない。八方塞がりだった。

「はあ……、……ん？」

最早時間の流れすら感じられない、光の失われたこの部屋に急に光が現れた。ベッドに投げられていたスマートフォン、それが通知の音が鳴るとともに光ったのだ。ゆっくりと手を伸ばしてその画面を見る。画面には『松原花音』という文字とともに、メッセージが表示されていて、ただ無心で、その画面を開いた。

画面が開いたら数秒のラグがあつて、メッセージが表示された。とても長い文章だった。思わず息が止まった。

『楓くん、まずは記憶が戻っておめでとう。楓くんが私のことを思い出してくれて、本当に嬉しかったよ。でもそれだけじゃなくて、言いたいことがあります。』

楓くん、ごめんなさい。記憶をなくしている時の楓くんに酷いことをいっぱいしてしまいました。記憶喪失の楓くんはまるで小さい頃からずっと一緒だった楓くんとは違うようです。すぐには受け入れられない私がいましました。それで楓くんの記憶が早く戻れと思って、きつとすごい苦勞をかけてしまったと思います。本当にごめんなさい』

「花音……」

花音の真意が聞いて俺も嬉しかった。だが、それ以上に俺は溢れ出る涙を止めることができなかった。俺は、なんてことをしてしまったんだ。

俺は一体、いつまで大切な人を裏切り続けるんだ。

気がついたら、体は動き出していた。さっきまで暗闇の部屋の中にいたはずだったのに、あつという間に家を飛び出していた。涙を流しながら街を駆ける俺の姿はたいそう滑稽だっただろう。きつとひどく愚かだったに違いない。

少し走って、街中の一軒家の前に着く。その家の表札には『松原』と

書かれて、掲げられていた。俺は迷わず、その黒いインターホンを押した。

「はーい……って楓くん？」

部屋着で現れた花音は、俺が来たことにとっても驚いていたが、そんな驚きに構う心の余裕すらなかった。早く、早く伝えなくちゃいけない。

「俺も、話があつて」

「えつと、上がつて？」

静かなリビングに流れるように通され、すぐさま俺は頭を下げた。

「花音……本当に……本当に、今までごめん……っ！」

「えっえっ？」

今までの自分の行いの全てが罪悪感となつて俺に滝のように流れ落ちてきた。俺は、裏切り者の烙印を押されようが、仕方がない人間だった。浮ついた考えに流され、自分の考えを正当化して、花音を見捨てたんだ。

「俺……花音がいるのにつ……千聖と付き合つて……花音のこと見ないフリしてっ」

「……うん」

涙が止まらない。泣いてちやダメだ。泣きたいのは花音の方だろう。そんなふうに分かたない自分を鼓舞させても、自分が重ねてきた罪はあまりに重すぎて、懺悔の涙は止まることを知らなかった。きっと俺の言葉自体もぐちやぐちやで何を言ってるか分からないだろう。考えすら全部ぐちやぐちやなのに。

「本当にっ、本当にごめん、ごめん花音っ……！」

「……うん、大丈夫だよ……」

泣き崩れる俺を花音は優しく慰めていた。

どれぐらいの時間が経ったか分からないが、漸く落ち着いてきた俺の頭を、花音はただ黙って撫でていてくれた。泣いていても仕方がないと思いついた俺は、涙を拭い、花音の方を改めて向き直った。花音もその双眸を赤く腫らしていたが、ただ真つ直ぐにこちらを温かく見てください。

「……本当に、ごめん」

「うん。……千聖ちゃんと付き合ってたんだね」

「……ごめん」

「謝ることじゃないよ。私だって……楓くんに辛い思いさせたから……」

「そんなこと……」

ないと否定しようとしたけれど、それはまるで今までの自分を全て裏切るような気がして言い淀んだ。それに、花音の反応を見れば、それは何かがありそうだった。

「……気づいてたのか？」

「……うん、なんとなく、分かってたよ。だからこそ、千聖ちゃんに取られるのが怖くなって……楓くんの記憶を早く取り戻そうとしてたから」

「そっか。……そうだよな、本当に、ごめん」

深々と頭を下げた。きっと俺の言葉にそんな価値すらないのかもしれないが、けれどこうする他はなかったのだ。

「ううん……、でもせめて私との関係を決着つけてからにしてほしかったかな」

「……ごめん」

もはや返す言葉もなかった。

……けれど、その言葉は過去の自分だけでなく、今の自分の背中も押していた。

ただ、静寂がこの空間を支配する。普段はわずかばかりでも聞こえてくるはずの街の喧騒すら、全く聞こえてはこなかった。

「……それで、楓くんはどうするのか？」

どうする、それが何のことかなんて、聞き返すまでもなかった。花音の薄紫の瞳は揺れていた。それは強い覚悟を秘めた、真剣な眼差しだった。

「私はね、楓くんがどんな選択をしても、怒らないから……」

自分の中で、答えは出ていた。ゆっくりと、とてもゆっくりと口を開く。

「……俺は、——」

「……うん。千聖ちゃんにはもちろん、言うんだよね？」

「……ああ。これが、せめてものけじめ、だから」

それでしか、もう俺は誠実さを表すことが出来なくなってしまったから。俺には、その手段しか残されてないんだ。

「……不安なんだね」

「まあ、な」

俺の表情を見るだけで俺の考えていることを見抜いてくるらしい、流石は付き合いの長い幼なじみと言ったところだろうか。

「……きつと、千聖ちゃんも許してくれるよ」

「そう……かな」

花音の後押しは凍えそうな心を溶かしてくれるほどに温かかった。

「楓くんはいい人だもん。私が保証するよ」

「……いい人か」

「うん、だってその証拠に、あの夜だって、千聖ちゃんのことを、庇って助けたじゃない」

……あの夜か。俺が思い出したくもない忌々しい夜。俺が選択肢を間違えた愚かしい夜。あの夜さえなければ、こんなにみんな狂わなくて済んだのかもしれない。……全部、俺のせいなんだ。だからこそ、千聖に伝えなくちゃならないんだ。

「……俺、そんなに、……花音たちが思うほどに、いいやつじゃないから」

「……えっ?」

短く言葉を残して、俺は花音の家を後にした。

ふうと小さく息を吐く。さあ、伝えにいかなくちゃ。それが俺に出来る精一杯の誠意だから。

だから、待っててくれ。千聖。

最終話 R e s e t s

私の心の動揺は収まらない。積もりに積もった心の澱みは、私の思考を混沌とさせていた。

楓が記憶を取り戻したこと、それは本来であれば喜ばしいはずだった。楓が病室で長い眠りから醒めた時、そして記憶喪失になっていることが分かった時、私は酷く落胆したはずだった。かつての楓はもういない。楓は私のことを覚えていない。そのことがわかった瞬間、まるで今自分の立っている地面が崩れ落ちていくかのような錯覚を覚えた。

けれど、楓の記憶喪失は、後々になってその意味を変えた。楓の葛藤は私の、楓への態度を変えることになった。

そして、私は誓ったのだ。私はこの楓を、今のままの楓を大切にしよう。だから、私は楓からの愛に、至高の愛で返すことを決意した。真に楓の恋人になると決心したんだ。

楓からの連絡は来ていない。楓が記憶を取り戻したと言うことを花音から聞いてから、楓とは話をしていない。だから、私は怖くなって、己の身を削ることでその恐怖を忘れることしか出来なかった。そして、私は自分に必死に言い聞かせる。

『楓は私だけのモノ』、それはまるで呪詛のように。
「……………えっ」

突如、枕元のスマートフォンが反応する。私はそれに飛びつくように画面を見た。

楓だ。楓から、連絡が来たのだ。来ていたのは、『今から会えないか？』と、そんな短いメッセージだった。もちろん断ることなんてなく、是が非でも会いたかった。会いたくなかったけど、会いたかった。だから、『もちろん』と返した。楓はどうやら家にまで来てくれるらしい。もうじき外も暗くなるからだろう。

「……………ふう」

リビングに降りて、ソファに腰掛けて一息つく。インスタントで作った紅茶からは湯気が立ち、口をつけるのだが、どうしようもなく

苦かった。

鼓動の音は全く止む様子を見せない。今更ながらに、会うことを約束した自分を恨んだ。

ピンポーン、という高い、無機質な音が響いた。楓だ。すぐに分かった。いじっていたスマートフォンを投げ捨てて、玄関に走った。

ガチャリとドアを開けた。

「……よっ」

「……楓。いらっしやい、上がって？」

「……ああ」

楓は何も言わずに私の後をついてきた。ボタンとドアの閉まる音がする。階段を登って楓を私の部屋に通すと、楓は押し黙ったまま、クッションのところに腰を下ろした。

「今お茶淹れてくるわね」

「……ああ。ありがとう」

一旦下に降りて、お茶を注いだ湯呑みと先ほど入れた紅茶を取ってくる。そして机にことりと置いた。私は少しだけ隙間を開けて、楓の隣に腰を下ろす。

「……そういえば私の家にくるのって、初めてかしら？」

「ああ。そういえば、そうだな」

話がまるで弾まない。楓の雰囲気、どこか恐ろしくて、なかなか私も話を踏み込めずにいた。けれど、聞かずにもいられなくて、一息ついて、楓の顔を見た。

「……記憶、戻ったのね」

「ああ。戻ったよ」

「……おめでどう、でいいのかしら？」

「……ありがとう、それで、話がある」

息が詰まった。うんともすんとも言えなくて、辛うじてギリギリでうなづいた。楓の口から出てきたのは、意外な言葉だった。

「まずは、ごめん。……千聖は俺の花音の関係分かったはずなのに、俺は記憶がないことを免罪符にして、千聖に惹かれて、そして、告白したんだ」

「……謝ることじゃ、ないから」

震えが止まらなかつた。この話だけは、したくなかつた。でも、私だつてそれが分かつて、楓に縋り、愛を伝えたのだから、逃げるわけにはいかなかつた。

「……俺、記憶戻つて、花音に謝つたんだ。謝つて、許してもらえような話でもないけど、でも……俺、千聖にも謝らなきゃいけないから」
「謝る……？」

「……きつと、俺、千聖のこと一杯傷つけて、これからも傷つけることになるから」

どうして……？ どうして、楓が私を傷つけることになるの？ 言葉の意味が分からなくて、混乱した。身体中が震えていた。怯えなのだろうか。フラッシュバックのように、過去の楓との思い出が流れてきた。それはとても温かいもので、心に安寧をもたしてくれたが、どんどん薄く消えていった。

怖い。

この先の、楓の言葉を、聞きたくなかつた。……だつて、これ以上、これ以上聞いたら、私。

壊れちゃうから。

「千聖、……俺たち、友達に戻ろう」

「……えっ」

時が止まる。世界の万物にヒビが入つて崩れる音がした。バクンバクンという心臓の鼓動すら聞こえなくなった。

楓と……友達に戻る？ 言っていることの意味が何も分からない。だつて楓は私の恋人で。私だけが、楓のことを本当の意味で愛せるのに。

どうして……？

どうしてそんなことを言うの……？

「……ごめんなさい、意味がよく分からないわ。……もう一度、言つてくれるかしら」

きつと私の声は酷く震えている。……だめだ。そんなこと言わないで。楓、貴方は私の全てなの。貴方が居なければ、私は私で居られ

ないの。

分かってしまった。

私は、壊れるのだと。

「……千聖、俺と、別れてくれ」

「なんで……?」

「え?」

「なんで、そんなこと言うのよ?! 私だけがっ、私だけが貴方のことを愛せるのに!!」

もう私は止まらない。止まれなかった。この世の全てが黒く染まっていく。

「……ごめん。俺は……俺は千聖だけを愛せないよ」

「あっ」

ああ、違うんだ。あはは……、そういうことだったのね。

「違う……」

「えっ?」

「そんなことを言う楓は……楓じゃない!!」

「ぐうっ」

目の前の男を壁際に追い詰めた。そして、その首を思いっきり絞めた。

返せ。

楓を返せ。

ワタシだけの。とても愛しくて大切な、たった1人の愛する人を返せ。

楓を返せ。ワタシの楓を返せ。

「ワタシの楓を返せええッツ!!」

そんな呪詛が響き渡った。私の華奢な体では、そんな長く絞めることなどできず、振り解かれた。しかし、そいつは肩で息をしていた。

「……ち、さと……。ごめん……」

「……え」

ふと、耳に届いたその声、その声は紛れもなく、私の愛した楓だった。けれど、今更自分で犯した大罪を訂正できることなどなく。

「千聖は……俺のこと、本気で……愛、してくれたのに……ごめん」
「あつ……ああ」

ああ。全て、無駄、だったのだ。私が、真剣に楓を愛そうと決心したことは。楓を私のものにする事など、出来なかったんだ。

ああ。ああ。

「あああああああつっ?!?!」

私は、狂った。壊れちゃったんだ。

遠くに見えた、私を守る、楓からの愛の印。どうせ叶わない恋なら……いつそ、このまま。

細く長いプラチナブランドは、深紅の赤に染められた。

人間の心など弱いもので、私の自我なんて簡単に崩れてしまった。芸能界を長く生き延びてきた分強いだなんて自惚れていたけれど、実際は私はたった一人の男に狂わされ、その男を狂わせた。

ああ、楓、愛しているわ。けれど、ごめんなさい。貴方のくれる愛の形じゃ、私はもう満足できなくなってしまったの。

私は、もう、壊れちゃったから。

楓の体が、力が抜けたように倒れていく。私はそんな楓を抱きとめた。最後に楓が見せたその顔は、微笑んでいるように見えた。

アイシテル。

私の歪んだ微かな声は、この世で一番愛する人に届いただろうか。

「……何、してるの」

茫然と立ち尽くして、どれぐらいの時間が経ったのだろうか。いや、実際はそんなに経っていないのかもしれない。

「……花音?」

後ろから声がして、振り向いた。なぜここにいるのか、そういえば玄関のドアの鍵だなんて閉めてなかったような気がする。そんなど

うでもいいことばかりが頭に浮かんだ。

「何してるって……え……」

私の目線は部屋に戻された。私の足元にはドロドロとした赤黒い液体と、かつて愛した恋人が動かなくなつて、横たわっていた。

「え、あ……かえ、で……」

「何してるのって聞いてるんだよ?!」

「あ……あ……」

私の手には血塗れのナイフがあつて、何が起きたかなんて明白だつた。私が……楓を……ナイフで……。

「なんでっ……なんでっ……」

胸ぐらが掴まれて揺さぶられる。視界がぐにやりと曲がつて、暗くなつていく。

「みんなに戻ろうつて……ううっ」

「うあ……あ」

息が出来ない。視界が真っ白に染まつていく。

「どうしてっ、どうして千聖ちゃんは二度も楓くんを殺したの?!」

「え……あ」

「あの夜……楓くんを突き落としたのは千聖ちゃんなんですよ……?!」

「……え」

溢れ落ちた雫とともに掴み上げられた手が離されて、なんとか呼吸ができるようになった。そんな花音の声を聞いた瞬間、頭の中をあの日の夜の光景が駆け巡つた。

『俺には、花音がいるから。だから、……ごめん』

『いやあああああつ!!』

私は理解した。この瞬間、全てを失つたことを。ならいつそ楓とこのまま二人で。

『あっ……』

『え……』

ほんの一瞬の気の狂いだった。気がつけば私と楓は二人で宙を飛

んでいた。

そうか、今まさに神社の石段から落ちているのだった。数秒続いたその浮遊の後に、強い衝撃が身体中に走ったのだった。

あれが……全部私のせいで。そして、今も。私が全て、愛する人^楓を。私の手で……。

ああ。

「あつ……あつ……」

ああ、全部。もう、手遅れなんだ。楓への私の愛も。私たち3人の、あの日常も。全部……全部。

はは……。

「あははははははは!!」

狂った笑いが虚空に響く。

赤く染まった銀の刃が私に突き立てられた。

ああ……、全部、全部終わったんだ。

ごめんなさい。花音、楓。

そんな想いは届くはずもなく消えていった。

気がつくとも私は血だらけのナイフを握りしめ、千聖ちゃんに突き立てていた。

……一体どこで道を間違えたのだろう。……でもこれで良かったのかもしれない。

足元では、楓くんと、千聖ちゃんが力なく横たわっていた。私の愛は、どこで間違えたのだろう。

「あはは……」

全ての力が抜けて、床に座り込む。床は血溜まりになっていて、とても座れるような場所じゃなかったが、ただ茫然とするしかなかったのだ。

「……あはは」

そっか、今なら自暴自棄になった千聖ちゃんの気持ち、よく分かるなあ。結局のところ、きつと楓くんも、千聖ちゃんも、私も、誰一人

として悪い人は居なかったんだもん。私が千聖ちゃんの立場でも、きつと何一つ変わらなかった。だから、私には千聖ちゃんを恨むことなんてできない。

「あはははは……」

時の流れが感じられないほどに、部屋は静かで、無機質に感じられた。雫が一滴、また一滴と滴るように落ちていく音だけが響く。

私たちの複雑に絡まった運命の糸は、こうして全て事切れる運命だったんだ。

「……千聖ちゃんも、居なくなっちゃった……」

そもそも手を下したのは、自分だと言うのに。

全てが全て、後悔しても、もう遅い。……そして。

「楓くんも居なくなつたのに……私が、私だけがっ、生きている意味なんて……ないよね」

……私は、全てに終止符を打った。

ごめんね、千聖ちゃん。……楓くん。

「バイバイ」

R
E
S
E
T
S